
東方紅葉記

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅葉記

【NZコード】

N3787P

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

犬走桜はいつものように友人の河城にとりと将棋を楽しんでいた。ところが突然、上司である射命丸文から妖怪の山に何者かが侵入したとの情報を知らされる。

そして半ば強引に捜索を命じられると、桜は足早に山へと向かう。

そして見つけたのは、一人の人間の少女だった。

犬走桜とオリジナルキャラがメインのお話。

もちろんその他のキャラも多数登場します。

時間軸は風神録まで。

更新時間は夜になります。

第一話（前書き）

紅葉記、というタイトルは単純に秋に思ついた作品だからです
個人的な見解が多く含まれているので、嫌悪などを感じさせてしま
つた場合はすいません；

東方二次創作の処女作です

生温かい目で見守つていてください（笑）

ご指摘等、ございましたらいつでも書き込んでください

第一話

「なあ、^{もみじ} 桃？ いつも将棋するのはかまわないのだが」「うん？」

駒を進めた少女が目の前の友人を見る。
桃と呼ばれた少女は小さく返事しながら、じいっと盤を見つめていた。

「上方にばれたりはしないのか？」

上司にサボってるぞ～とか言われたりするんじゃないか？」

「ちょっとした息抜きぐらい大丈夫です。私はいつも真面目に任務を全うしてますしね。……それよりにとり？」

「む？」

にとりと呼ばれた、レインコート姿の少女が首をかしげる。

桃は小さく微笑んで、

「ほい、王手」

「む……？ ひゅい！？」

にとりは妙な声をあげて自分の王将の前の駒をにらみつけてから……

「ま、ままま、待った！」

「ふふ、待った無しですよにとり。今回は私の晩^ごはんがかかるりますからね」

桃はちらりと、そばに置いてあるカゴに手をやる。

中には川でとれた新鮮な魚がぴちぴちと跳ねている。

今日の勝負は、この魚を賭けての真剣勝負だった。

「今日は私の勝ちってことで」

「む、無念……」

「えへへ。それじゃあいただきます」

桃はにっこり微笑むと魚の入ったカゴを手にとる。

そして一度大きく伸びをしてからゆっくりと立ち上がった。

「それじゃ、そろそろ任務に戻ろうかな。

あんまりサボつてると先輩に怒られそうだし

「んうそだな。サボつてのばれたら音速で突っ込んできそうだし

な」

「なんてたつて、幻想郷最速の先輩ですからね……」

「いやあ、幻想郷一速くておまけに才色兼備な先輩だなんて……褒めてもなにもでませんよ?」

「へ……? うわああ!?

いつの間にか、桜の真横に黒髪の少女が立っていた。

「あ、ああ文先輩!?^{あや} い、いつの間にきたんですか!?

「ついさっきよ。しかし毎度毎度、桜はこんな河童と将棋なんてしていて楽しいんですか?」

「こんな、つてのは失礼だろ! てかそんなに褒めちぎつてもいいないだろ!?

にとりが怒つて声を荒げるが、文はそれを無視して、「そんなことより桜、いますぐ任務にもどりなさい

「え、なにがあつたんですか……?」

文は少しだけ顔をしかめてから言った。

「人間が、この山に侵入したそうです。あなたはそれを大至急搜索するようにと、大天狗様からの命令よ

「に、人間……?」

この妖怪の山に人間が侵入した?

どうして? 何のために?

深く思考する間もなく文が続ける。

「ぐずぐずしてないでさつさといきなさい! 見つけ次第、すぐに私に報告すること! わかつた!?

「は、はいい!」

その剣幕に気押され、桜は慌てふためきながら飛んでいった。

「……なあ文? ホントに人間がこの山に侵入したのか?」

「ええ。目撃情報がこちらに多数寄せつけれますし。大天狗様はさつさと排除しろとのことですですが……」

「ですが？」

すると文は、悪戯っぽく笑みを浮かべてカメラを取り出した。

「良い記事になりそうですよ？ 妖怪の山に迷いこんだ人間！ その運命やいかに！ つてね」

「ああ、そういうこと……」

にとりは深いため息をついた。

「人間……か。迷いこんだ人間ってどんなヤツなんだろうな？」

「さあ？ とりあえず今は柵の連絡を待ちましょうかね。にとりさん、お茶」

「つてここで待つかよ！？ ……はあ、しょうがないなあ」

言い返すのもめんどくなつたにとりは、渋々お茶を用意する。

（柵も大変だよなあ……）

そして再び大きなため息をついてから、にとりは友の向かつた山を見上げた。

第一話（前書き）

言われるがままに妖怪の山の搜索を始めた桺。広い山の中をあてもなく探していると、紅葉のストラップがついたカメラを見つける。そして、その持ち主と思われる人間が平野で倒れているのを桺は見つけた。

第一話

「さて、侵入した人間を探すのはいいけど……」

桺は高い木の枝に立つて辺りを見回した。

妖怪の山、と一口にいってもその実とても大きな山である。この広い空間を桺一人で捜索するのはとても困難で……

「せめてなにか情報が欲しかったなあ」

あてもなく探すのは本当に骨が折れるだろう。

ため息つきつつも、桺は枝から枝へと飛び移る。

木々の隙間を獣のような速さで駆け抜けた。

彼女も天狗のはしぐれ。

身体能力は当然高い。

これぐらいのこと造作もないのだ。

「…………ん？」

ふと、桺はなにかを見つけた。

高い木の枝から降りて、それを確認する。

「これは……」

見覚えのある、小さな黒い箱。

よく先輩が使う写真を撮るための道具、カメラだ。

「先輩が落とした……わけないか。侵入した人間の持ちものなのかな」

それをひょいと拾いあげてまじまじと見つめる。

カメラには紅葉をあしらったストラップがついていた。

「ここで落としたってことは、まだこの近くにいるはず……」

辺りを一度見まわして、その後再び木の枝へと飛び移る。すると、桺の目が細まった。

少し先の開けた場所で、誰かが倒れている。

恐らく、この山に侵入した人間だろう。

ようやく見つけることができた。

「……一応、武器を構えておきましょうか」
腰に収めていた片刃の剣と盾を握りつつ、桟は飛び出した。

第三話（前書き）

倒れていたのは、人間の少女だった。
桺は恐る恐る接触。

その少女は桺に名乗ると、また先ほどのように倒れてしまつ。
桺はしかたなく少女を保護し、文たちが待つ大滝へと引き返したの
だった。

草むらのかげに身を潜めつつ、ゆっくりと倒れている人間へと近づく桜。

「急に襲われたりしても、すぐに対処できるよ！」
無意識に刀を握りしめる手に力が入る。
いつでも戦えるよとに全身に緊張をはしらせた。
そして一步一步と、人間へと近づいていく。
やがて、その人間の表情が見えてきて……
桜は驚いた。

「女……の子？」

その人間といつのは少女だった。

眠っているのか、気絶しているのか、少女は倒れたまま動く気配がない。

桜は注意深く少女を観察する。

肩ほどまで伸びた黒い髪。

端正な、しかしどこか幼さが残る容姿。

そして紺色の、桜が今まで見たことのない変わった衣服。

「お、おおおまえ！　い、生きてる……のか？」

恐る恐る声をかけてみると、やはり少女は倒れたまま。不安になつた桜は少女のそばまで近づいて、

「お、お～い……」

頭を指で突つついたり、搖さぶつてみたり……
しかし反応はまったくない。

「どうしよ……死んでる人間なんてはじめてだし……

「う、うう……ん

「のわあ！？」

ちいさなうめき声に、桜は驚いて後方へと飛び退いた。

「ふ、不意打ちとは卑怯な！？　おとなしく……？」

少女が少し、ほんの少しだけ体を起こした。

桺は刀を構えながら少女を見据えて、

「…………？ 殺氣もなにもかんじない……」

田の前の少女はまるで寝起きの子猫のよろこび、ほんやうとまぶたをあけてキョロキョロとあたりを見回すと、

「いこ……ど！」

呟いた。

そしてぐるりと首を桺に向ける。

「いこ……いこは妖怪の山です。あなた、な、何者なんですか？」

微妙に警戒しつつ、桺が訊ねる。

少女はあいかわらずほんやうとした田のまま、ゆうべつと口を開いた。

「時雨、葉月」

「時雨葉月、ですか。といふであなたいつたいどいどいのいこ……

……つて、もしもし？」

名前を名乗った途端に少女、葉月はぱたんと倒れてしまった。

しゃべることに力を使い果たしたのだろうか？

「…………しかたありません。とりあえず保護しましょつか」

桺は少女を肩にかづぐと、手近な木の上へと飛んだ。

一度方角を確かめてから強く枝を蹴る。

そうしてまた木から木へと移りながら、桺は文たちが待つ大滝へと向かった。

第三話（後書き）

更新は今のところ不定期ですが、書けたら一日一話ぐらいのハイペースで頑張りたいと思っています。

しかしあ、もちろんお話を思いつかなかつたりすることもありますので、その時は「勘弁を；

基本、毎週一話を目標として作業することにします。

第四話（前書き）

声が聞こえる。

何者かが、彼女のまわりで話をしている。
彼女はそれにこたえようとするが、なぜか体が思うように動かなか
つた。

少しづつ力をいれて、全身の感覚を呼び起こす。
そして……彼女は目覚めた。

第四話

声が、聞こえる。

誰かが、私の近くで話をしている。

大丈夫ですか？ とか。

死んでるの？ とか。

変わった服ですね？ とか。

大丈夫、と答えようとしても声が出なかつた。
死んでないよ、と動こうとしても力が入らなかつた。
最後のは……どういう意味なのかよくわからなかつたけれど。
とにかく私は、一生懸命体を動かそうとした。
が、結果は相変わらず。
どうしてだろう？

もう死んでしまつたのだろうか？

声が出ないのも、声を出す体が無いからだろうか？

でも、指の感触とかそういう感覚はある。

どうして体が動かないんだろう？

……動かない？

というか、私は動かそうとしたんだろうか？
力いれただろうか？

落ち着いて、まずは深呼吸。

息ができるんだ。

死んでるってことはないだろ？

まずは足でも、腕でもいい。

とにかく体を動かして。

感覚を呼び起こして、耳を澄まして、目をひらいて、そして……

光を、感じた。

第四話（後書き）

今回は少し短めです；

第五話（前書き）

目が覚めるとそこは見知らぬ場所、見知らぬ世界。
そして初めて目にした、大滝と紅葉の幻想的な景色。
不安と好奇心に包まれながら、葉月は白髪の少女と出会いつ。

第五話

気がつくと、彼女は見知らぬ場所で寝ていた。

真つ先に見えた質素な天井。

和風な室内。

全然覚えのない場所だ。

どうしてここにいるのだろうか……？
あれこれと思考を巡らせていると、どこからか轟々と音が響いてる
のに気づいた。

これは滝……の音だらうか？

彼女は気になつて起き上がる。

不思議と体はすんなりと動いてくれた。

少しふらつが、歩けないというわけではない。

そのまま立ち上がって、正面にある窓を開けてみた。

「うわあ……」

目の前には、巨大な滝が激しく水しぶきをあげながら流れ落ちてい
た。

今まで見たこともないほど大きく、そしてとても……美しかった。
流れ落ちる滝とともに舞い踊る、燃えるように真つ赤に色づいた紅葉。
まるで秋が空から舞い降りてくるような、とても幻想的な風景だつ
た。

この風景を、ぜひとも収めたい。

そう思つて彼女はポケットに手を入れ……

「……あれ？」

ない。

カメラがなかつた。

いつも制服のポケットにしまっていたデジタルカメラがない。

もしかして、どこかに落としたのだろうか……？

「ど、どうしよう……あのカメラは私の大切な」

「お探し物はこれですか？」

すると後ろから突然声がきこえた。

振り返つてみると、そこには見知らぬ少女が立っていた。少女、にしてはやや凜々しい顔立ち。

白を基調とした道着のよつた衣服、それと同じ白髪をなびかせ、腰には太刀を帶剣していた。

彼女と同じ年だろうか。

いやそれよりも気になつたのは……

「……犬耳？」

「耳？ 探してるのは耳ですか？」

不思議そうに首をかしげた少女には、まるで犬のよつた三角の耳がちょんと立つていた。

時々ぱたぱたとさせる仕草がとてもかわいらしく。

なんかこう、もふもふしたいといふかなんといふか……

しかしそんな妄想は、少女の持つていたものを見た瞬間消え失せた。忘れもしない、紅葉をあしらつたストラップのついた……

「そ、そのカメラ！」

「やはりあなたの持ちものでしたか。……ですが」

少女は小さくうなずくと、なぜか腰の太刀に手をかけ、

「その前にまず事情聴取です。事次第によつてはあなたを斬らなければなりませんので」

「え、ええ！？ キ、キキ斬る！？ ちょ、私なんにも悪いことしてないよ！？」

「いえ、この山に侵入した時点で立派な犯罪者ですので。……さて葉月さん、どうしてこの山に？」

突然自分の名前を呼ばれて、葉月は驚いた。

「……なんで私の名前を知つてるの？」

「なんでつて、さつき自分から名乗つたじゃないですか。覚えてませんか？ 平野の真ん中であなたは倒れていて……」

「ち、ちょっと待つて……」

なにも、思い出せない。

私が倒れていたという平野も山も……

それ以前に、自分がなにをしていたのかも思いだせなかつた。

思いだそうとするといふと、それを拒むように頭に激痛が走る。

「痛ッ……」

「ふむ……まだ起きたばかりのよつですし、今は無理しないよつにしてください。事情聴取はそれからでかまいませんので」

そう言つと白髪の少女は部屋を出ようとして、

「あ、あのー」

「……? なんですか?」

「そ、その。ありがと「わこます。助けてもらひやつて……え

つ
と
「もみじ 桃いねばじゅ です。犬走桃」

少女、桃は小さく微笑んでみせた。

「少ししたら食事を用意します。それまで、ゆつくり休んでくださいね」

「ありがと「わこます……」

「いえ。それでは失礼します」

桃は一礼すると静かに退室した。

「事情聴取……か」

はたして、なんて答へればいいのだろうか。

葉月はその答えを知らないのに。

「うう、緊張してきたな……」

それでも、あまり深く考へないよつてするため葉月は田を開じた。

「ええい！ 河童はだまらっしゃい！ こういうのは速さが大事なんです！ 病み上がりだろうと死にかけだろうと私は迅速な取材をお！？」

「ちょ、誰かコイツ止めろー！？」

下は下で大騒ぎ。

その声を聞いて、葉月の胸の不安が少しづつ大きくなりはじめた。

第五話（後書き）

少し間が空いたが、第五話完成です。

前回と違つて、今回は長めの文章。

まだまだ拙い文章ですが、読んでいただければ幸いです。

……作者の日本語も怪しいんで、変なところを見つけたらビシバシ指摘しちゃってください；

第六話（前書き）

葉月が部屋で休んでいたその時。
文の抑えられぬ探究心を止めるべく、桜とことりは奮闘していた。

第六話

「離せ〜！ 私は取材にいくんだあ！ 離せ河童ゴルア！」

「も、桜い！？」 ここにどうしたがならないのかあー！？」

「先輩落ち着いて！？」 そんなに焦らなくても彼女は逃げませんっ

「アーティスト」

「だからおまえ落ち着けって！？」

暴れる文を、桺とにとりが一人がかりでなんとか抑える。

でも、あの子よく妖怪の山に侵入してきたよな。天狗の戒がたた

「その天狗は恐らく将棋で走しながらサボつていたからにちがいあ

りません

「わたくしのせいですかあ！？」
そんなのひとつよお

とはいへ、にとりと将棋をしていたのは拭いようのない事実。

文は鋭い筆触で桜をこらむと、

「あなたの任務はなんですか？」

「して、その強戒とは？」

「し、哨戒とは、敵の侵入や襲撃にそなえ、その周囲を警戒しつつ

「見張ることです！」

てるじゃないですか

「…………ぐすん」

そのもの涙かこぼれそいた

反論はできない。

「……それで、彼女の具合はどうでしたか？」

文が話題を切り替える。

桜は涙を腕で無理やり拭いてから報告する。

「起き上がったばかりで少々疲れているみたいで。もう少し
すれば話もできると思います」

「なら、そろそろ取材……いえ、事情聴取しましょつか」

「面白そーだから私も行くぞー」

意気揚々と手帳とペンを取り出す文。

それに付き添う桜とにとり。

三人は葉月のいる一階の部屋へと向かった。

第七話（前書き）

いよいよ事情聴取の時がきた。

葉月は緊張しながらも、榎の上司である射命丸文の質問に正直に答える。

少し話題がそれてしまつたその時、榎の友人であるにとりがあるものを見つけた。

それは葉月の、遠い昔の記憶を呼び覚ました。

足音が、ゆっくりと近付いてきた。

その音は葉月の部屋の前で止まって、
「桺です。よろしいですか？」

先ほどの少女の声が聞こえてきた。

「どうぞ」

ほんの少し間が空いてから、戸が開く。

「失礼します。葉月さん」

現れたのは桺と、その後ろには再び見知らぬ人たち。

レインコート姿の青い髪の少女と、活発そうな黒髪の少女。

「えつと、そちらは？」

「私の友人の河城にとりと、上司である射命丸文さんです」

「ども。清く正しい射命丸です！」

「か、河城にとり……だよお」

「にとりさんなに緊張してんですか？ 河童は人間の盟友なんですよ？」

「い、いやだつて初対面だし……」

にとりと名乗った少女はひどく恥ずかしそうに頬をかいていた。

カツパは人間の盟友……？

葉月にはなんのことかいまいちわからなかつたが……

「さて、早速ですがいくつか質問をしたいのですがよろしいですか？」

清く正しいとアピールした文はすでにペンを片手に葉月の返事を待つていた。

「は、はいッ……」

いよいよ事情聴取。

葉月は緊張して声が少し上がってしまった。

「緊張しなくてもいいですよ。簡単なコトしか聞きませんので。で

はまざ……」

一呼吸置いてから、文が言った。

「では、葉月さん。あなたはどうしてこの山に入ったのですか？」

「わ、わからないです……」

「わからない……？ 理由もなくこの山に入ったのですか？」

「その、気がついたら桜さんに助けてもらつていて……それ以前のことを見えていないんです」

「記憶喪失ってやつなのか？」

横からにとりが一言。

それに文は困ったようにうめいて、

「それは……困りましたね。明確な理由がないと面白い記事になりませんし……」

「記事？」

「いえ、こちらの話です。しかし……なにか思い出せませんか？ どこから来たとか、なにか探しているとか、記憶の手がかりになりそうなものとか……」

「手がかり……」

必死に思いだそうとするが、なにも思い浮かばない。

手がかりになりそうなもの……？

「そうだ、カメラ……」

「桜さん。それを彼女に」

桜が先ほど葉月に見せた、紅葉をあしらつたストラップ付きのカメラを手渡した。

「変わったカメラ……ですね。私の使ってるものと少し形状が違います」

「え、普通のデジタルカメラですけど……？」

「でじたるかめら？」

まるで初めて聞いたかのようにあやふやな発音で呟いた文。取材よりも、葉月のカメラが気になりだした様子で、

「そのカメラ見せてください！」

「え、ええ……」

ひつたくるようにして葉月のカメラを借りると、レンズを覗いたりシャッターのボタンに触れたり……

「おおー！ カッコイイ！ 欲しい！ これください！？」

「ちょ、先輩本題からずれますよ！」

未知のカメラを手にしてテンションマックスな文をどうぞ」となだめる桜。

その時、ふとカメラの小さなモニターに何かが映った。

「あ……」

「これは……？」

「写真のデータみたいだな。このカメラで撮影した画像がここに表示されているらしいぞ」

「む。さすが妖怪弾頭でエンジニアのにとりさん。機械にはお強いですねえ」

「見ればわかるだろこれぐらい……ん？ これ、誰だ？」

にとりが一枚の写真に注目した。

大きな木の根元でたたずむ少女と老人の写真。

にとりが指差したのは、少女の隣で静かに微笑んでいる老人。

「これは葉月さんですかね？ だとしたら……」

文が葉月に視線を移すと、

「…………」

葉月はその写真を、いや、その老人をじっと見つめていた。

とても、大切な人……

葉月の心のどこかでそう告げている。

「……そうだ。

この人は……

「おじいちゃん」

遠い昔の記憶。

とても大切な、大切な記憶が葉月の脳裏にゆっくりとよみがえった。

第七話（後書き）

読んでくださっている皆様、ありがとうございます？

読みにくい部分等ありましたら、いつでもコメントして下さい
調子はいいので、明日も一話更新できれいです。

第八話（前書き）

葉月の遠い昔の記憶。

笑いあう祖父との思い出。

そして、別れ。

残された不思議な写真を目にした幼き葉月はることを決意した。

第八話

それは、葉月の遠い過去の記憶。

「ねえおじいちゃん！ 今日もアルバム見せて！」

「はつはつは。今日も葉月ちゃんは元気だな。いいよ。おいで」

葉月は祖父のアルバムを見るのが大好きだった。

写真家の祖父、時雨天高しぐれあまたか

自然風景専門の写真家で、祖父は毎日各地を飛びまわっていた。

時には北へ。

時には南へ。

時には、遠い国へ行くことも。

カメラを手に世界を歩く祖父が、葉月は好きだった。

だから葉月は毎日のようにアルバムを見せてもらっていた。

「この写真はどこで撮ったの？」

「これかい？ これはずっとずうっと北の寒い国の森で撮った写真だよ」

「おじいちゃん寒いの嫌いなの？」

「カメラを構えたら寒さなんてへっちゃらだよ」

「すごい！」

自分では見られない風景や世界。

それを全て祖父が、祖父の写真が見せてくれる。

葉月はそれが大好きだった。

葉月は祖父の柔らかな笑顔に微笑みかえして、

「私も、おじいちゃんみたいにしゃんかさんになりたい！」

「おお！ それは楽しみだなあ。葉月の撮った写真を早く見てみたいなあ」

「まつかせて！ どんな場所がいい？ 遊園地？ それとも……」

祖父のような写真家になりたい。

祖父に、私の見た景色を、世界を見せてあげたい。
だから私は……

「……おじいちゃん」

「ああ……葉月ちゃん。どうしたんだい……悲しそうな顔をして」「お母さんが、もうおじいちゃんには会えなくなるつて……」

「そつかあ……葉月ちゃんは寂しいかい?」

「寂しいよおーすつと一緒にいたいよおー。」

泣きだしそうになる葉月。

ベッドの上の祖父はそれを見て、寂しそうに微笑んだ。

「泣いちやダメだぞ? 別に一度と会えなくなるわけじゃないんだ」

葉月の後ろで、両親は泣いていた。

顔をそむけて。

声を押し殺して。

「葉月ちゃんはおじいちゃんに写真を見せてくれるんだひつへ。おじこちゃんは待ってるから」

「うん……ゼッタイ……見せる」

力ない手でぽんぽんと頭を撫でてくれた祖父。

そして、部屋を後にして……

祖父が亡くなつた。

葬式はあいにくの雨だったが、それでも大勢の人たちが来てくれていた。

葉月は終始泣きっぱなしになつた。

「葉月ちゃん。ちょっとといい?」

式が終わつてしまひくして、部屋で休んでいると祖母が葉月に声をかけた。

「なあに? おばあちゃん」

「これ、おじこちゃんから

取り出したのは小さなアルバム。

何度も祖父のアルバムを見ていた葉月だったが、このアルバムは初めて見るものだった。

それを葉月はゆっくりと開くと、不思議なことに最初のページにはなにもなかつた。

「写真ないよ？」

「それは天高さんの宝物なの。一番後ろのページを開いてみて?」

「うん……」

言われたとおり、葉月はアルバムの最後のページを開いた。
そこには、一枚の写真が収められていた。

「この写真は?」

「天高さんの見たい景色、かしらね。ずうつと昔に天高さんが偶然撮影できた写真だつて言つてたわ」

その写真は残念ながらピンぼけ写真で、真つ赤な光が写っているだけ詳細がわからなかつた。

「どうして? これがおじいちゃんの宝物なの?」

「そひ……ねえ。天高さんは、それが幻想郷の写真だつて言つてたかしら?」

「げんそつきよ?」

聞いたこともない言葉に首をかしげる。

それを見て祖母は笑いながら言つた。

「幻想郷っていうのはね、おどき話の国のことよ葉月ちゃん。ともも素敵な場所だつたつて天高さんは言つてたけど、これじゃただのピンぼけ写真よねえ……」

おどき話の国。

祖母はそう言つた。

葉月はそれを聞いて、ものす「ぐぐドキドキしていた。

おじいちゃんは、おどき話の世界をも写真に収める」ともできました
ごい写真家だった。

それはとてもすごいことで、とても誇れること。

もしかしたらおじいちゃんは、ずっとこの世界を夢みて旅をしていったのかもしれない。

ならば、私に出来る」とは……

「おばあちゃん」

「どうしたの？」

「私決めた。この、げんそつきょううの『真』を撮つておじいちゃんに届ける！だから『真家』になつて、ゼッタイゼッタイげんそつきょううにいく！」

「おやまあ。そんなこと葉月ちゃんにできるのかい？」

「やる！ ゼッタイ写真撮るもん！」

祖母は本気で信じてくれたのかどうなのかはわからなかつたが、嬉しそうに微笑んでいた。

いつか必ず、祖父に幻想郷を見せてあげたい。

その想いは幼き葉月の胸にしっかりと刻み込まれた。

第八話（後書き）

オリジナルキャラクターである葉月の回想の話です。個人的に葉月の祖父、天高という名前が気に入っています。この二名のオリジナルキャラクターにはちょっととした共通点があります。

些細なことだから気づきにくいけど、気づく人いるかな？

第九話（前書き）

過去の記憶。祖父との思い出。

話を聞いた文は、葉月に幻想郷を巡る旅を提案する。
彼女の護衛には桜を選択した。

そして一人は幻想郷の各地を巡る旅に出る。

第九話

「ははあ。なかなか興味深い話でしたねえ……って桺？　いくら犬だからってわんわん泣くんじゃありませんよ」

「わ、わんわんなんて泣いてません！？　つていうか犬じゃありますせんし泣いてもいませんよ。……ただちょっとほろりとしてしまつて」

桺からハンカチを取りだして涙を拭う桺。

文は少し考えるようにあごに手をあてる。

「しかし今の話を聞くかぎり、あなたはこの世界の外の世界からきた人間ですよね。どうやってこの世界に来れたんでしょうか……？」

「それは私にも……」

昔の記憶がよみがえつても、葉月は現在に至るまでの経緯をまったく思い出さなかつた。

不安げにうつむく葉月。

桺はそんな彼女を見てから、文へ意見する。

「それで、彼女の遭遇は？」

「そうですねえ……別に悪意があつて妖怪の山に侵入したわけではないみたいですし、お咎めなしつてことでいいんじゃないですか？」

「え？　だつて大天狗様に報告は」

「シャラップ桺！　それについては私が後で報告しておきます。それより……」

文はうつむいたままの葉月に視線を戻し、

「あなたはどうしたいですか？　このままここにいたいですか？」

「え？」

そして悪戯っぽく笑んで見せると、

「せつかく幻想郷へ来れたのですから、そのカメラでビシバシ激写したいでしょ？　おじいさんのためにも、ね？」

「文さん……！」

「では決まりですね。桺！」

「は、はい！？」

突然呼ばれて思わず大声を出してしまった桺。

「あなたに彼女の護衛を命じます。彼女の行動の補佐をしなさい」「わ、私が？ それじゃ哨戒の任が……」

「それはこの河童にでも任せます。適当なガードロボットでも作ってもらいますよ」

「お、おい無茶苦茶言うなよなあ」

「出来ないのですか？ ではあなたもこの白狼天狗と一緒に彼女を侵入させた罰を受けてもらいま」

「……わ、わかったわかったよう。はあ。しょうがないなあ……もう

文の無茶苦茶な注文に、やれやれといった感じでにとりはため息をもらした。

「先輩。彼女の補佐つて、なにをしたらいいんですか？」

「あなたには彼女の足になつてもらいます。彼女に、この幻想郷を案内してあげてください」

「案内……ですか？」

すると文は手帳にペンを走らせなにかを書き込むと、それをやぶつて桺に渡した。

「適当に観光名所を挙げてみました。ここならいい写真が撮れるんじゃないですか？」

「えっと……」

それを一通り確認して、

「……こんな場所入つて大丈夫なんですか？ どう見ても入つたら怒られるような……」

「私の名前を出せば幻想郷のフリー・パスになりますよ？」

「ほ、ホントかなあ……」

不安そうにメモと文の顔を交互に見る桺。

「大丈夫……かなあ？」

「葉月さんもよろしいですか？ 今から彼女を好きに使ってくれて
かまいませんので、この幻想郷を自由に見て回ってください」
「わ、わかりました」

葉月は何度もうなずいた。

今から、幻想郷を見てまわれる。

祖父同様に旅ができる。

そう思うと、胸がいっぱいになつて……

「それでは、葉月さんと一緒に……わ、葉月さんどうかしたんです
か！？」

桜が振り返ると、葉月はぼろぼろと涙を流していた。

心配する桜に、葉月は首を横に振つてみせて、

「ち、違うんです。ただ、すごく嬉しくて……つい……」

「感極まつた、といったところでしょうか。わかりますよその気持ち。私も特ダネをつかんだときはこう、グッとくるもんです……」

「おまえ、ちょっと黙つてたほうがいいんじゃないかな？」

拳を握りしめる文に、にとりはあきれた様子で言った。

そして葉月は桜に向かつて丁寧に頭を下げる、

「よろしくお願いします。桜さん」

「い、いらっしゃー……この犬走桜、全力であなたを助力いたします
！」

桜もかしこまつて葉月に一礼をした。

そして。

「ところで、どうやってその場所へ向かうんですか？」

「そうでした。あなたは飛べませんから……そうだ。私の背につか
まつてください」

「い、いりますか？」

「ええ。しっかりつかまってくださいよ。飛びます！」

「え、と、飛ぶって……やあー？」

「桜」？ 彼女用にスペルカードを……ってあら？ もうこいつちやいましたか

ぼんやりと空を見上げる文に見送られ、二人は幻想郷を巡る旅へと出発した。

第九話（後書き）

ここから少し作業が遅れそうです；

次のお話は、もしかしたら月曜日辺りになるのかも……

第十話（前書き）

妖怪の山を降りる桺と葉月。

二人は最初の目的地である紅魔館を目指すのであった。

第十話

「す「じ」い……私、空飛んでる……！」

葉月の眼下に広がる景色が、びゅんびゅんとす「」い速さで移りかわつている。

桜は木のてっぺんに上手く着地して、また蹴つて飛んでいくのくり返し。

「厳密に申しますと飛んでいるのは私ですが……まあ、この幻想郷に生きる妖怪のほとんどは飛べますよ。飛べないのは里に住む人間だけでしょうか？」

「妖怪……？ そういえば、さつきも妖怪の山とか河童とか言つてたけど……桜さん妖怪なの？」

「ええ。そうですよ」

「え、ええ！？ 妖怪！？ オ、お化けえ！？」

突然暴れ出す葉月に驚いて、桜は一瞬バランスを崩しそうになつて、「ちょ、ちょっと葉月さん急に暴れたりしないでください！ 危ないですよ！」

「す、すいません……」

怒られて、一応落ち着きを取り戻したがしゅんとなる葉月。それを確認してから桜は再び木を蹴つた。

「そ、その、妖怪なんて初めてだし、怖くてあの、その……」

「怖い、ですか。でも大丈夫ですよ。ここには人間に悪さするような妖怪はいませんから安心してください」

「本当……ですか？」

心配そうにつぶやく葉月が、桜には少しおかしくて、

「私はどうです？ やっぱり怖いですか？」

「桜さんは……その……」

「その？」

「……桜さんは、かわいいです」

「へー？ ちよ、わわわッ！」

葉月の予想外の言葉に、柵はつっかり足を踏み外しそうになつて、
「だ、大丈夫……ですか？」

「え、ええ。一応……しかし、か、かわいいだなんて……」
背中を振りかえると、葉月はにつこり微笑んでいて、
「なんだか子犬みたいで……すごくかわいいですよ？」

「こ、子犬……ですか」

ははは、とかわいた笑いを浮かべる柵。

（私は白狼天狗なのに、なぜ皆一様に私を犬と称するのだろう……
？）

柵の、誰にも聞こえないような小さなつぶやき。

「い、コホン。そんなことより、そろそろ目的地が見えてきました
よ」

「え？ どこですか？」

「あれです」

柵が指差す方向に、紅い色の屋根のよつなものが見えた。
「あれは？」

「最初の目的地、紅魔館です」

そして柵はいつそう強く木を蹴ると、一気に山を下りていった。

第十話（後書き）

ちょっと遅くなりました；
ここから幻想郷巡りが始まります。
最初の目的地は紅魔館です。

第十一話（前書き）

紅魔館に辿り着いた二人。

門番を起こすか起こさないか。

二人で悩んでいると、幕をもつた少女が目の前でなんの気兼ねもなく

紅魔館へと入っていった。

第十一話

葉月の田の前に広がる、とても大きくて豪華な紅いお屋敷。

「うわあ……」

桜は今しがたこの建物を、紅魔館と呼んでいた。

「よつ……と。到着しましたよ葉月さん」

その建物から少し離れた場所に着地すると、桜は門の方へと視線を動かして、

「す」「いお屋敷……お姫様でも住んでそうだなあ……」

「姫ではなくお嬢様なら住んできますよ。まあ行けばわかります。……

しかし、こいつたお屋敷つて普通警備が厳しそうなんですけど

……

「……入れるの？」

「とりあえずいつてみますか」

門の前まで歩いてみると、案の定門の前には誰かが立っていた。

葉月と桜が近付いてみると、

「……」

門の壁に寄りかかって静かに目を閉じる少女の姿。

拳闘着に身を包んだ、やや背の高めの赤い髪の少女。しかし、耳を澄ますと小さな寝息が聞こえてきて、

「……寝てるんですか？　この人」

「寝てますね。完全に。こんな方に門の番人をさせているなんて警備が薄いですねえ……」

そして桜はあちこち見まわしてから、

「他に警備の者はいないようですね。この方を起こして聞いてみますか」

「でも、起こしたらやつぱり入れてもうえないんじゃないかな？」

「むう……しかし勝手に入るのも無作法ですよ？　やはつこいつ」とはきちんと了承をいただいてから

「邪魔するぜ〜」

ふと、荒っぽい声がしたので振り返つてみると、門の前に人影が見えた。

魔法使いがかぶるような三角の帽子に、黒と白のローブ。流れるような金の髪に手には箒をひとつ握りしめていた。その姿は、まるでおどぎ話に出てくるような魔法使いそのものだつた。

「え、あの人……？」

そして少女はなんのおかまいもなしに勝手に門の奥へと進んでいつしまつた。

「彼女……たしか前に山に侵入した魔法使いの……」

「入つて大丈夫なのかな？」

「とりあえずいつてみましょうか

その少女を追いかけるように、一人は門の奥へと向かつた。

第十一話（後書き）

このお話をかりてこんなキャラが登場します。
オリジナルのキャラを壊さないようアレンジできるかぎりと心配
です；

第十一話（前書き）

図書館で出会つた二人の魔法使い。

葉月と桜は撮影の許可を得た途端、すぐさま紅魔館を飛びだした。そして去りゆく一人を、紫の瞳はぼんやりと見つめていた。

第十一話

「お～いパチュリー？ 本を借りにきたぜ～」

ほこりっぽくて、カビ臭くて、暗い部屋。

ここは紅魔館の中に位置する巨大な図書館。

正式な名前があつたのかなかつたのか。

それはこの館の主のように、長い年月を生きたせいで、その名を忘れてしまつたのかもしれない。

「……いつもくるのはいいけど、私は借りていだなんて一言も言つてないわよ？」

「いいじゃねえか。こんだけ本があるんだし、そのうちの一冊や二冊ぐらい借りたって」

「魔理沙。あなた一体今まで何冊本を借りたと思つてるの？」

「んなこといちいち覚えてねーよ。お、これ面白セージやん！」
タイトルを見ただけで表紙を開くのは、先ほどの口調の荒い魔法使いのような格好をした魔理沙と呼ばれた少女。

それを咎めていたのは、紫の髪をなびかせる薄い桃色のネグリジエのようなローブ姿の少女。

パチュリーと呼ばれたその少女は、先ほどから本棚を漁る友人にゆるんだ紫の瞳を向けて、

「いつもしもいつも本を勝手に借りていくけど、許可もなしに借りていくことに罪悪感を覚えないわけ？ 一応こここの本は紅魔館の財産であり、私の大切な……つて聞いてるの魔理沙？」

「魔力增幅……こんな方法もあるのか。へえ……お、ここには鍊金術の本？ どれどれ……」

「……聞いてるわけないか」

そしてパチュリーは読んでいた本を閉じると、一度大きく伸びをしてから、

「それで？ 魔理沙が連れてきた部外者さんはそこでなにをしている

のかしら?」

「……やはりばれましたか」

本棚の裏に隠れていた桜が姿を現す。
もちろん、一緒に隠れていた葉月も。

「ん? アタシが連れてきたってこいつらをか? アタシは知らないぞ」

「見つからないように気配は消していましたから……」

「それでも妖怪の気配ぐらい気付きなさいよ」

「んなこといちいち気にしねーつて」

そして、言い合つ二人の視線が一気に葉月に向かって、

「で、誰だおまえ?」

「見かけない顔……ね」

「おまえはいつも図書館にいるんだから知るわけねーだろ」

「失礼ね。たまには外に出るわよ。たまには」

「あ、あのそのえつと……」

激しい口論を田の当たりにして怯える葉月。

「彼女は葉月さんといって、えと、私の友人です」

そんな彼女を桜がフォローに入る。

それで少し安心した葉月が姿勢を整えてから、

「あの、時雨葉月……です」

「ふうん……? 時雨とはまた聞かない字だな。^{あやな}アタシは霧雨魔理^{キリサメマ}沙な^{リサ}」

「……。パチュリー・ノーレッジ、よ

何故か機嫌悪そうに、顔をしかめてみせるパチュリー。

「それで。なにか御用なのかしら?」

「えつと、今葉月さんと幻想郷を巡つている最中でして、道中で訪れた美しい場所を彼女のカメラで撮影したいのですが

「へ~。文のパシリみたいなもんか?」

面白そうににやにやしながら言つ魔理沙に、桜は少しむつとした顔になつて、

「し、失礼な。えと、彼女の思い出ついへつ……といったところでしょうか？」

「おまえついには人間のパシリまで……」

「してませーん！？ 私は先輩の部下であつてパシリじゃないです！」

「……といひで、図書館で大声をあげるといつのもどうかと思いつただけれど？」

「う……」

「えと、そのう……」

もつともなことを言われてたじろぐ桜。

葉月は口論の間であたふたしていることしかできなかつた。

「……まあ、紅魔館が美しい場所と称されたのは素直に喜ぶとして。撮影、か。私はこの館の主ではないのだから勝手に許可できな

いわね」

「そうですか。……困りましたね」

「で、でも、お屋敷の中に入れただけでも嬉しかつたですよ」

「しかし……」

笑みを浮かべて見せた葉月に、桜は申し訳なさそうな顔になる。それを見てパチュリーはつくんと小さくうなつてから、

「……そうね。外觀から撮るのぐらいならかまわないんじやないかしら？ それぐらいなら咲夜も気にしないでしょ」

「ホントですか！？ ならせつそくいきましょう葉月さん！」

「は、はい！」

「あ、ちょっと待ちなさ……」

まるで疾風のごとく、桜と葉月はすゞい速さで図書館を飛びだしていった。

「ふう。落ち着きのない人たちね。……ねえ魔理沙、彼女の気配は感じた？」

「あん？ だから気配なんて気にしてねーって」

「そう……」

パチュリーはあごに手をあて思案するよつひつむこで、

「……まあいいわ」

それから、読みかけていた本を再び開いた。

第十話（後書き）

いつも読んでくれてる方々、ありがとうございます。
あつといつ間に十話過ぎちゃいましたw
お話を終わるのは……ひとつになるかな？

第十二話（前書き）

紅魔館を出てから葉月は桜と協力して写真撮影を行つた。

撮影を終えて桜と出発しようとしたその時、時計塔の上に不思議な人影を見つける葉月。

しかし、振り返ってみてもそこにはだれもいなかつた。

第十二話

「葉月さん。準備はよろしいですか？」

「えっと、ちょっと待つて……」

紅魔館から少し離れた位置で、葉月はカメラのチェックをしていた。バッテリーに撮影環境、フォーカスやらピントやら。入念なチェックを終えて、葉月はカメラをかまえる。

「おー。なんか似合つてますね」

「えへへ、ありがと」

褒められれば誰でも嬉しくなる。

葉月はほんの少し照れつつ、レンズ越しの世界を注意深く見つめていた。

湖畔と、メインである紅魔館とのバランス。

大きな時計塔も写したいし、広がる湖畔も捨てがたい。うんうんとうなりながら、微妙に移動したり、しゃがんだり、背伸びをしてみたり。

「……私は暇ですね」

ふわあっと欠伸をして木に寄りかかる桜は、葉月の作業を後ろから見守ることしかできなかつた。

そのせいで、なにもすることがない。

「ううん、これだと木が邪魔になっちゃうな……」

「だったら私が一刀両断しましょーうか?」

「や、えっと、そこまでは……」

「そうですか……」

すると、桜は一つひらめいて、

「なら、少し飛んでから撮影してみませんか？ 私も手伝いますか

ら

「え、でも……」

遠慮がちに手を振る葉月に桜は笑顔で、

「あなたの補佐をするのが私の任務ですから。少しごらいわがま
いつてくれてかまいませんよ？ それに、私個人もあなたのお力に
なりたいですし」

「本当？ そ、それじゃあお願ひしようかな……」

「了解しました。それじゃあつと」

手近なところにちょうど良い木が立っているのを見つけると、桺は
葉月を背負つてから一瞬で飛んだ。

「どうです？ ここからなら一望できますよ」

「うん。これなら時計塔も湖も一緒に写せる」

紅魔館の大きな時計塔と湖畔の両方をいつぺんにレンズに収めると、
葉月は背負われたままの姿勢でシャッターを切った。

「これで紅魔館での作業は終わりですね。お疲れ様です葉月さん」

「桺さんのおかげだよ。ありがとう」

二人は笑いあいながら紅魔館を後にする。

葉月がもう一度紅魔館を見ようと振り返ると、

「……え？」

時計塔のてっぺんに小さな人影が見えた。

遠すぎてあまりはつきりとは見えなかつたが、その人影には翼のよ
うなものが見えた気がした。

しかしそれは鳥が羽ばたく翼とは似ても似つかない、宝石のような
ものが七色に輝いていて……

「桺さん、あれなに？」

「え？ なにか見えたんですか？」

振り返る桺。

葉月も振り返つてからもう一度時計塔を見ると、そこにはだれもい
なかつた。

「あ、あれ？」

「なにか見つけたんですか？」

「え、えっと時計塔の上に人影を見たはず……なんだけど」

「……いえ、なにも見えませんけど？ 気のせいではないですか？」

「そう……なのかなあ」

葉月は微妙に納得がいかなかつたが、それ以上考へることを諦めて歩き出した。

「白い犬と……へんなの」

葉月が見かけた人影はいつの間にか紅魔館の門の前に立つていて、

「へんなの来てたなら私も遊びたかつたなあ」

寂しそうにつぶやいた後、ふっと姿を消してしまった。

第十一話（後書き）

自分のミスで読者の方を不快にさせてしまい、申し訳ござりませんでした。

二次創作をするついでマナーがなってませんね……

次のお話も明日投稿します。

第十四話（前書き）

一方、文は人間の里で博麗神社の巫女である靈夢と一緒に行動していた。

すると人間と話をしている見覚えのある死神、小野塚小町の姿を見つける。

彼女はとある命令である人物を探していた。

その人物の特徴を聞いて、文はあの少女の姿が脳裏に浮かんだ。

第十四話

所変わつて、ここは紅魔館から離れた場所にある人間の里。桺の上司である射命丸文は巫女装束姿の少女と一緒に歩いていた。
赤い大きなリボンで髪をくくつた清楚な顔立ちの少女。
名を、博麗靈夢。

彼女は里からほど近い場所にある神社、博麗神社の巫女である。
「……私につきまどつても面白い記事なんか書けないわよ文？」
「『里まで下りて賽銭をかき集める貧乏巫女！』『博麗神社の崩壊カウンタダウン！』なんて記事はダメですか？」
「失礼ね。私はただ単に買い物をしに来ただけよ。というか勝手に神社を崩壊させないで」

「そうですね。崩壊寸前なのは日常茶飯事ですし」

「私を怒らせたいのかしら？」

「いえいえめつそうもありませ……おや？」

すると、文の視線の先に大きな鎌を手にした少女の姿があった。紅色の髪を一つに束ねた背の高い少女は、なにやら楽しそうに話をしている。

二人とも見覚えのある人物のようだ、

「なんであるサボリ死神が人間の里に……？」

「これってばスクープの予感！ 文、行きまーす！」

「あ！ ちょっと待ちなさいよ！」

飛び出していく文を慌てて追いかける靈夢。

その少女も、こちらに気づいたようで、

「お、靈夢に天狗か。あんたち、こんなとこでなにしてんだい？」

「それはこっちの台詞よ。なんであんたがこんなとこにいるのよ」

「ついに三途の川をクビになつて職探しですか？」

「おいおい、あたいがいつクビになつたって？ こんな真面目で愛らしい死神を映姫さまが見捨てるわけないじゃないか」

主張の激しい胸を張りながら自信満々に言う少女。

「あれ、いつぞやクビになりかけたのでは？」

「な、なつてないって。実際あたいは今仕事中なんだよ」

「仕事？ サボリ死神の小町が？」

サボリ死神、おのづかにまち小野塚小町はその言葉に顔をしかめて、

「だから仕事中だつての。実は人を探しててね。あんただち変なヤツ見かけなかつたか？」

「変なヤツ……」

靈夢と文は顔を合わせてから、

「田の前に」

「サボらない小町さんは変ですね」

「……おまえら」「

はあとため息をついた後、小町は真面目な顔になつて、

「少し前な、こっちでちょっととした騒ぎがあつたんだよ」

「騒ぎ？ つて、私そんなこと知りませんよ？ そんなスクープがあつたのならどうして私に教えてくれなかつたんですか？」

「私も異変があるだなんて気づかなかつたけど？」

「ん~……異変つちやあ異変なんだけど……」

小町が言葉を濁す。

その様子に文は瞳を輝かせて興味津津。対して靈夢はあまり興味のない様子。

「詳しく話を聞かせてくださいよ～小町さんッ？」

「おまえらなら話しても……まあいいか。実はわ、三途の川で死者が一人いなくなつちまつたんだよ」

「はあ？ やつぱりあんた仕事をサボつてたんじゃないの」

違う違うと小町は首を振つて、

「いや、仕事はちゃんとやつてたさ。でも、ホントに一人いなくなつて……」

「いなくなつたつて、あんたのボロ船に乗つたら死者はそのまま彼

岸へ行くんでしょ？」

「そうさ。渡し賃をいただいて後はそのままあたいがのんびり舟をこぐだけ。……けど、そいつってのは最初から変な感じでさ」「変な感じ……」

胡散臭そうに眉をつりあげる靈夢。

文はさつきからすごい速さで手帳にメモしまくっている。

「『私はまだいけない』だと、『やることがあるんだ』だのぼそぼそつぶやいて、終いにや勝手に船を降りたんだ」

「え？ あの船って一度乗つたら降りれないんじゃないんですか？」
「それになんでそいつしゃべってるのよ。幽霊がしゃべるわけないじゃない」

「だから変なヤツだつていつてるだろ？ それでそのことを報告したら、映姫さまが難しそうな顔してさ。それで、あたいはそいつを連れてくるように命令されたんだ」

「立派な異変じやないですか。それで、その人の特徴とか覚えてないですか？」

「特徴？ ん~、そうだな……」

小町は思いだすように腕を組んでうなつてから、「紺色の見かけない服……それと、おまえの持つてるのに似たようなものを持つてたような……」

「え、これ……ですか」

小町が指さしたのは文には必須の仕事道具。
紺色の服に、カメラを持った人物。

文の脳裏には一人の人物が浮かび上がっていた。

「カメラねえ……？ そんなものをもつたヤツなんて私はこいつぐらいいしか浮かばないけど……？ つて、どうかしたの文？」

「え？ は、はあい！？ いつも清く正しい射命丸ですよ？ な、なんですか靈夢さん？」

だれにでもわかりやすいぐらい動搖する文。

その様子を見てから靈夢はにんまりと笑つて、

「文には心当たりがあるみたいね。なら、今回はあなたにまかせる

わ

「こ、ここ心当たりだなんてあありませんよ、全然！ 全く！
これっぽっちも！」

「バレバレよ。小町、こいつ連れていったら？ 役に立つわよきっと」

それに小町は大きくうなずいて、

「そうみたいだね。それじゃ遠慮なく連れていかせてもらひよ。ほ
ら天狗いぐぞ！」

そして

「ああ～！？ ちょッ 瞬夢さんひどい～！？ こうなつたら仕返し、
後で瞬夢さんのとんでもない写真ばらまいてや～あ～！」

怒声を響かせながらするずると引きずられていく文を見送つてから、

「……とりあえず文と小町にまかせておけば大丈夫でしょ。私は帰
つてお茶でも飲も

ふんふんと鼻歌交じりに瞬夢は神社の方へと歩いていった。

第十四話（後書き）

小町の性格が微妙に変な気がするような……
読んでくれている方々、ありがとうございます。
次の更新は月曜日になりそうです。

第十五話（前書き）

そして冥界に辿り着く桜と葉月。

怯える葉月をからかう桜。

ささいなことで笑いあえる一人の間には、すでに確かな絆があった。

第十五話

「さて、冥界に着きましたが……葉月さん大丈夫ですか？」

後ろでぶるぶると震えている葉月。

葉月は桜の腕をひしとつかんでいて、

「こ、ここお化けばっかりで怖くて怖くて……」

「そりやあここは冥界、死者の世界ですからね。でもなにもしてこなかつたし大丈夫だつたでしょ？？」

「それはそうなんだけど……」

未だに腕をつかみっぱなしの葉月に、桜は優しく微笑んで、「ここの幽靈も無害ですよ。もつ逝き先が決まつてますから」として桜はあたりを一度見まわす。

特に目立つものもない、ただ荒涼とした平野が広がるだけの殺風景な世界。

いまのところ、目的地の白玉楼は見えていない。

「しかし葉月さんはホント怖がりなんですね。そんなんじゃこの幻想郷を見てまわるだなんてできませんよ？」

「だつて私、お化けとかホントに苦手で……」

「もしも自分の写真にお化けが写つたらどうするんですか？」

「え！？ し、心霊写真なんて嫌だよ！？」

血相変えて言い切る葉月の表情が楽しくて、思わず桜は笑つてしまつた。

「わ、笑い事じゃないですか！」

「あつははは。いえ、すいません……ふふ

「もう……意地悪」

ふくれつ面で桜を見つめる葉月。

そして二人は仲良く笑い合つた。

「……ねえ、桜さん？」

「なんですか？」

ひとりしきり笑つてから、葉月はなぜか少し寂しそうな顔をして、

「私たち、もう……友達だよね？」

そんな顔をされた桜は思わず目を丸くしたが、すぐに笑顔に戻つて、

「ええ。あなたはもう、私の大切な友人の一人ですよ」

桜は一片の迷いもなく答えた。

それに葉月は優しく笑んで、

「そつか。……ありがとう」

急に照れくさくなつた桜は、顔の火照りを隠すためにそそくさと立ち上がつた。

「そ、それではそろそろ出発しましょつか。時間が惜しいですしね」

「うん」

そして二人は再び歩き出した。

第十五話（後書き）

次のお話は戦闘回になります。
ちょっとだけお楽しみにしててください。
戦闘シーンはあんまり自信ないんで少し不安ですけど……；

第十六話（前書き）

白玉楼へと伸びる石段。

背中に感じる殺氣を警戒しながら歩く桺。

そして門の前に辿り着いた途端、葉月に向かつて白刃が襲いかかつた。

第十六話

二人がしばらく歩いてくると、田の前にとても大きな階段を見つけた。

一見するとなだらかな傾斜の石段だが、その先を見上げてみると真っ白い霧に包まれていてその奥はなにも見えない。

それはつまり、この石段がとても長いということを意味していく……

「ほえ……。こ、これを見るの？」

「ここ以外の道が見当たりませんし、上のしかないですね」

「…………」

思わず言葉を失う葉月。

(……白玉楼に住んでいる人は毎日ここを上るのかなあ……大変そう)

そんなことを考えながら階段の前でぼんやりしていると、桜はさつそく階段を上り始めていて、

「あ、いやなんでもないです」

（……エスカレーターみたいに動いてくれればいいのに）

心中でつぶやいてみるが、もちろん石段は動かない。

結局葉月はその長い石段をゆっくりと上りはじめた。

石段を一段一段上るごとに首筋をなでられるような気味の悪い寒気を感じ始める一人。

「さ、寒気がしますね……」

「そう……ですね」

一方で、桜はあることに気づいていた。

（誰かが私たちのことを見てる……）

ちらちらと、殺氣を含んだような視線がこちらを監視しているような気がしていた。

どうも最初から、階段を上りはじめたころからずっと見られている

らしい。

でも、気配はまったく感じない。
これだけ上手く気配を殺しているといつゝとは、恐らく相手は相当の手練だろ^う。

桜は少しだけ葉月のそばに寄つてから、腰の太刀に手をかける。いつでも対応できるように静かに力をこめながら、周囲に意識を向ける。

「桜さんどうかしたの？ なんだか怖い顔をして……」

「え？ あ、いや別になんでも……」

気づかぬうちに表情が強ばつていたのだろうか、葉月が桜の顔を見て心配そうに眉をひそめた。

それ以上不安を与えないように、桜は笑みを作つてみせて、「来たことのない場所ですので、少し警戒してしまって」「でも、ここ^の幽靈は無害なんでしょう？」

「ええ……」

葉月には気づかれないよう、桜は笑みを崩さないようにながら太刀を握る。

こんな足場の不安定な場所で襲撃されて対応できるだろうか？ 彼女を守りながら……戦えるだろうか？

桜の全身に緊張感がまとわりつく。

いつ。

どこから。

どうやつて攻めてくる？

頭の中であれこれ思考を巡らせていると、いつの間にか石段を上りきついていて大きな門扉の前に辿り着いた。

「うわあ、大きな門……」

「これが白玉楼の……」

静かにそびえる木製の大きな門。足を踏み入れようとしたその時、先ほどから感じていた殺気が一気に膨れ上がり、

「……ッ！？ 葉月さん危ない！」

「え？」

刹那。

葉月に向かつて目にも止まらぬ速さの白刃が襲いかかる。 桃は獣のような瞬発力で地を蹴ると、葉月を抱えて大きく後ろに飛んだ。

「何者！？」

「外しましたか。一太刀で仕留めるつもりだったんですが……」

葉月の元いた場所には帯刀した一人の少女が静かに立っていた。 緑色の可愛らしいスカートに、子供のような幼い容姿。

背丈も普通の子供と同じくらいだが、幼さの残る容姿には不釣り合いな刀を帯刀していた。

脇差と同等の長さの刀と、それより少し長めの刀を、一方を背に收め、もう一方は右手に構えている。

その少女は険しい表情で二人をにらみつけてきて、「ですが、この白玉楼に侵入する不埒な輩は誰であろうと……斬ります！」

「葉月さん下がつて！？」

少女は一瞬で踏み込み、桃との距離を一気に詰めてきた。

「速いッ！？」

「せいやあ！」

そして放たれた鋭い袈裟斬りを、桃はギリギリのところで避ける。 頬をかすめる刃と、それと同時に巻き起こった凄まじい風圧に顔をしかめる桃。

一体こんな小さな体のどこにそんな力があるのだろうか……

崩れた体制を整える桃の頬に嫌な汗と赤い零が滴り落ちる。

「も、桃さん！？」

「大丈夫……ですよ」

「……？ もう一人は人間……？」

頬の血を腕で乱暴に拭うと、桃は太刀と盾を構える。

本気の戦闘なんていつ以来だろうか。

桜は目の前の少女に意識を集中させる。

……しかし彼女は圧倒的な強さだ。

今の一瞬で大体の実力差を把握した。

恐らく、無傷で勝つなんてのは到底不可能な相手。

どうにか勝つために思考を巡らせていると、その隙を逃さんとばかりに少女は烈風の如く激しく斬りつけてきた。

「せい！　はあ！　でええい！」

「ぐ……ツ！　これでは、ちょっと……！」

放つ刃の軌跡が見えないほどの神速の太刀が再び襲いかかってくる。桜はその攻撃をすんでのところで防ぐので精一杯だった。

反撃しようにも、こんな太刀筋を見せる相手に一瞬でも気を抜いたらあっさり斬られてしまう。

どうしようもなかつた。

こんなにも力の差があるので、もはや勝てるかどうかも……

「はあああツ！」

それはほんの一瞬の迷い。一瞬の油断。

少女はその一瞬を見切つて刀を大きく横薙ぎに払うと、桜の太刀が大きな弧を描いてから地面に突き刺さった。

「ツ！　しまつた！？」

「勝負、ありましたね」

「ぐ……ツ！」

桜の首筋に刃を突きつけ冷たく見据える少女。

寸前まで迫る死の気配。

ここまでかと諦めたそのとき、

「やめて！」

悲痛な叫び声が、聞こえた。

葉月は桜と少女の間に割つて入つてくると、田いづぱいに両手を広げて少女に立ちはだかつた。

全身をガクガクと震わせながら、それでも懸命に桜を守りつつとして

いる。

「だ、ダメです！　葉月さん逃げて！？」

「嫌！　友達を、梶さんを死なせたくない！」

「……いいでしょ。では、望み通り一人まとめて」

「ツー？　やめ　！」

そして少女の刃が容赦なく一人に襲いかかるとしたその瞬間、

「はい、ストップストップ～？」

この緊迫した場に全く相応しくないなんとも聞の抜けた声が響くと、少女の刃が葉月の首筋でぴたりと止まった。

声の方へ振り返ると、少女は驚愕の表情を浮かべて、

「ゆ……幽々子様！？　どうしてここに？」

白玉楼の門の前に、にこにこと微笑む桃色の髪をした少女が現れた。

「え……？　あれ、生きてる……」

梶と葉月はお互いの体を確かめてから、幽々子と呼ばれた少女の方に視線を動かす。

着物とは違うゆつたりとしていてどこか優雅さが漂う衣。地に足付かなによつにふわふわとした感じで、少女は穏やかに微笑着んでいる。

桃色の髪を揺らしながら、少女はおっとりとした聲音で、

「ダメじゃない妖夢つたら。私の大切なお客様を斬りつけちや」

「え！？　お、お客様？？」

妖夢と呼ばれた少女は葉月と梶と、それからにんまり笑う幽々子とを交互に見てから、

「ほら、ちゃんと謝つて？」

その笑顔に、妖夢の表情は見る見るうちに蒼白に変わり、

「も、ももも……申し訳ございませんでしたあ！！！」

そして少女は地面に頭がぶつかりそうになるぐら、深く深く頭を下げて謝罪した。

第十六話（後書き）

文章の拙さはご容赦ください；
自分でも納得のいく文章がなかなか書けなくて書いたり書き直したり……

早く上手に書けるようになりたいです。

第十七話（前書き）

白玉楼の主、西行寺幽々子に招き入れられた桜と葉月。にこにこと微笑む幽々子に、桜は思い切って撮影の許可を申し出る。すると、意外なほどあっさり承諾を得たのだった。

第十七話

「「めんなさいね～？」この子につたら近付く人を問答無用で斬りかかっちゃうから……」

そう言いながら楽しそうに微笑んで見せる桃色の髪の少女、この白玉楼の主こと西行寺幽々子。

「それが私の仕事です。それより、来客の「」予定があるのなら先に言ってくださいよ」

そう言って少し頬を膨らませた白玉楼の庭師兼護衛である少女、魂魄妖夢

二人に案内されながら桜と葉月は部屋へと案内された。

「では、お茶を用意いたしますので少々お待ちください」

一礼の後、妖夢はそつと部屋を退室した。

「そ、その……突然のご無礼をお許しください……」

姿勢をただした桜は、幽々子と向かいあうと深く深く頭を下げる。葉月も真似して丁寧に頭を下げる。

「いいのよ～。私も退屈してたところだし」

「それに、私たちの命まで助けてもらつて……」

「あの場はああでも言わなきゃ妖夢が納得しないもの。あの子は融通が利かないのがちょっと……ねえ？」

ふふっと優しく微笑む幽々子。

そしてその穏やかな瞳が桜と葉月を交互に見てから、

「それで？ この白玉楼になにか御用かしら？」

「えつとその、私たちは今幻想郷を巡っている最中でして、途中訪れた美しい風景を彼女のカメラで撮影したいのですが……」

「へえ……？ なんだか面白そうなことしてるのね？」

続けてとうながす幽々子。

「それでの、この白玉楼での撮影許可をいただけないでしょうか？」

「お、お願ひします」

桜も葉月も再び頭を下げる。

それに幽々子はここにこしながら、

「あら、それぐらごお安い御用よ。それじゃあ……あとで妖夢にこの庭を案内させましょうか」

「あ、ありがとひざわこますー。」

三度頭を下げる一人。

「そんなにかしこまらないなくしてもここのにて、相変わらずにここにしながら幽々子が言つて、戸の外に人の影が現れた。

「幽々子様。お茶のじ用意ができました」

妖夢の声だった。

幽々子がどうぞと告げてから、妖夢はゆっくりと戸を開きお茶と菓子をふるまつた。

「じ苦勞様。それじゃ、このお茶の後に案内せらるわね」「案内？ なんのお話ですか？」

「つふふ。後でね」

幽々子が菓子をつまみながら悪戯っぽく笑んで見せると、妖夢は心底不思議そうな顔になつた。

第十七話（後書き）

のほほんとした雰囲気の持ち主、西行寺幽々子。
上手く表現できてるか心配で心配で；
まだまだ修行が足りませんね…

第十八話（前書き）

妖夢に案内された優雅なお庭。

目に映る全てが美しく、とても趣のある庭園。

冥界にいるといふのに、葉月はいつしか撮影作業に夢中になつてい

た。

第十八話

二人が案内されたのは、この白玉楼が誇る広大な庭園。

「うわあ、すごい……」

思わず溜息が出るほどにその庭園は美しかった。

見事なまでに手入れの行き届いた豊かな花や木々。

趣のある、石と砂利で表現された川の風景。

不思議そうに見つめる葉月に、妖夢はそれが枯山水かれさんすいだと丁寧に教えてくれた。

「なんだか芸術的なセンスを感じるなあ……ホントにステキなお庭ですね」

「ありがとうございます葉月さん。そういうていただけると、私も手入れしている甲斐があります」

「このお庭は妖夢さんが手入れしてるの？」

「ええ。それも私の仕事の一つですから」

「他の庭師さんは？」

「このお庭は、全て私一人でお世話してます」

「す、すごいなあ……」

庭のあちこちを見渡しながら、葉月はどんなふうに『真を撮影しよ

うか考えていた。

白玉楼をバックに枯山水を収めるか。

それとも、この庭園そのものだけを撮影するか。

いやいや白玉楼だけを大きくバーンとアップで……

「どうしよう……迷っちゃうなあ」

すると、何故か妖夢は少し残念そうにつぶやいた。

「もう少し時期が早ければ、この白玉楼で満開の桜を見ることができただんですが……」

「桜？ 幻想郷にも桜があるの？」

「幻想郷にも……？」

「ああ！？　あ、あれが桜の木ですかね！？」

あまり葉月のことをべらべらと言いふらすのも失礼と思い、桜は適当な木を指差して無理やり話題を反らした。

「……今となつてはもはや枝ばかりですけどね。春になれば、この白玉楼が満開の桜に包まれるんですよ」

「桜かあ……すごいなあ。私も見てみたかったな……」

「こればっかりはさすがに……」

「そ、そうだね……ごめんなさい」

庭を一通り歩き終えた葉月は、早速カメラを用意した。

そして以前のようにあれこれ調節しながらレンズ越しに白玉楼を見つめる。

「……その、桜さん。一つよろしいでしょうか？」

「なんですか？」

必死にカメラを構えたり離したりする葉月を見つめながら妖夢はぼそつとつぶやいた。

「ここはたくさんの中が出入りする場所ですので、もしかしたら撮影したときに他の幽霊が写つてしまふかも……」

「はッ！？　ここが冥界だといつのをすつかり忘れて……つて葉月さんストップストップ！？」

勢いよく飛び出した桜の後ろ姿を、妖夢は少しだけ笑みを浮かべながら見つめていた。

「……不思議な方たちですね」

庭の真ん中であれやこれやと話し合う妖怪と人間。

そんな光景が、妖夢には不思議と新鮮な光景に見えた。

第十八話（後書き）

もう少しで白玉楼編も終了です。
そういえばサブタイトルないのはちょっと地味ですね。
少ししたら付けたそうかな。
……

第十九話（前書き）

撮影を終えると、桜と葉月は次なる目的地へと旅立つ。不思議な二人組の後ろ姿が見えなくなるまで、幽々子と妖夢は静かに見送った。

第十九話

「 もへ、 セウコウ」とはもう少し早く教えてほしかったなあ
「 すいません。 すつかり忘れてて……」

撮影も終え、 二人は縁側で庭園を眺めながらのんびりと休憩してい
た。

静寂の中、 池の鹿威しおどしが水を流す音だけが小気味よく響いていた。

「 ここの次はどこに行くの? 」

「 えっと、 メモには…… つと」

桜が取り出すメモを覗きこむ葉月と幽々子。

…… 幽々子?

「 あり? もう行つてしまつの? 」

「 う、 わッ! ? 幽々子さんいつの間に! ? 」

いつの間に現れたのか、 桜と葉月の間に幽々子がちょこんと座つて
いた。

「 ついでつき。 びっくりせちやつたかしら? 」

「 全然氣づかなかつた……」

「 つふふ。 それで、 あなたたち次はどこへ向かつの? 」

桜は気を取り直してメモに目を落とし、 読み上げる。

「 えつと、 次は…… 太陽の煙と書いてあります。 一年中が向日葵に
包まれている場所だそうですよ」

「 へえ、 なんだかステキそうな場所じゃない。 今度はそこを撮影す
るのね? 」

「 太陽の煙、 向日葵…… かあ。 なんだかすごく楽しみ」

葉月はまだ見ぬ景観を頭の中で思い描き、 思わず口元がゆるんでし
まつた。

「 そうですね。 では、 すぐにでも出発しましょうか」

「 あり、 じゃあ門の外まで送るわ。 妖夢、 あなたもこっちにいらっしゃ
いな」

幽々子は渡り廊下を歩いていた妖夢をつかまると、一人と一緒に門の外へと向かつた。

「それじゃ、頑張つてね」

「はい。今回ありがとうございます」

「えつと、お茶とお菓子美味しかったです。本当にありがとうございます」

いました

仲良くそろつて一礼をしてから、一人は白玉楼に背を向けて歩き出した。

「……不思議な方たちでしたね」

門の前で妖夢は、その後ろ姿が見えなくなるまでしばらく見つめて、それから振り返る。

誰もいなくなつた白玉楼の門扉が静かに閉ざされた。

第十九話（後書き）

あけましておめでとうございます。

年末年始はいろいろあって更新できませんでした；
すいません…

今回は一話連続で投稿します。

第一十話（前書き）

文が小町に引きずりられて辿り着いた先は地獄だった。
小町の上司である閻魔、四季映姫の目の前で事の次第を説明をせると、映姫は小町に再び指令を出した。
彼女を早急に見つけるように、と……

第一十話

「えつと……それで小町さん？ デリして私がここにいるのでしょうか……？」

「そりやもちろん、映姫様に会つてもらうためさ」

小町に無理やり引きずられて辿り着いたのは地獄だった。

といつても死後の世界というわけではなく、小町の上司である四季・^{しき} 映姫^{えいき}の仕事場。

まっすぐと伸びる廊下の先にそびえる豪華に装飾された扉。

その向こうで、この地獄で最高の権利を持つ裁判長が待っている。今から閻魔^{えんま}に会うのだ。

そんな状況、妖怪だらうと人間だらうと緊張するものである。

「面倒だから、あんたに事の次第を直接映姫様に説明してもいい。その方が手取り早いだろ」

「いや、あなたのお仕事はその人間を探すことが先なのだから、つてうわああ！？」

そして小町は豪華な装飾の扉をノックもせずに豪快に開け放つ。

「映姫様、重要参考人を連れてきまし」

「小町！ 入る時はノックをしなさいと何度も言つてるでしょう！」

？」

開けた途端襲いかかる、爆音にも似た大声で一人の耳が一瞬聞こえなくなつた。

地獄、いや幻想郷全土にまで響き渡りそうなほどの大声の主は、小町を見つけるなりいきなり説教を始めた。

「そもそもあなたは礼儀というものがなつていません！ 上司の部屋に入るのにノックもせず、そんなだらけきつた恰好のままで私の部屋に入り、かつなんの連絡も寄越さないまま部外者まで連れてくる！ あなたはそれでも彼岸を担う死神なのですか？ 仕事だつてサボるし渡し賃はばらまくし……って小町！ 聞いてるの！」

？」

「きやん!?　すいません!/?　すいません!/?　もうしないから勘弁してください……！」

それはもう地獄の魔王にひれ伏すがごとく、地面にべつたりと土下座する小町の情けない姿。

「…………」、これは恐ろしいモノを見ちやいましたね……」

それでも言い足りないのか、映姫は文のことなど全く気にせずに小町を延々と叱り続けた。

最後のほうは、ほとんど仕事に関係ないようなお説教になっていたが……

「…………ごほん。それで重要な参考人といつのはあなたですか」

「そ、その通りでござります映姫様……」

瀕死状態の小町が床に突っ伏したまま答えた。

耳にタコができるほど、なんて言葉では到底足りないほど）の説教をよくもまあ耐えたものだと文は微妙に関心していた。

「え、えつと……わ、私は清く正しい射命丸文です。それでの、ええつと……」

「盗撮に情報漏洩、スパイ活動に器物破損……と。あなたはいつでも地獄に落ちる準備が出来てるようですね」

「え?　な、なな何なんですか今の!?　私は清く正しく愛らしい真面目な新聞記者ですよ!/?　そんな不名誉な罪状なんて知りませんよ!/?」

「詐欺も追加、と」

「わ〜!?　わ〜!?　ストップストップ!/?」

「そんなくだらないことはさておき」

「……いや、私には全然くだらなくないんですけど……」

ぜえはあしながらも文は机に向かう映姫をしつかりと見据えた。片側だけ少し長めの、深い緑のショートヘア。

文様の入った衣服にスカート、装飾の施された大きめの帽子をかぶ

つていて。

どうやら書類をまとめている最中だったようで、机の上にはいくつか書類が散乱していた。
なんの書類かはわからないが、恐らくは死者のデータかなにかだらう。

「それでは、彼女の」とでわかつてることを全て話してください。
洗いざらご全てです」

「は、はい。えと、なにから話したらよいのや？……そう、あれは今をさかのぼること」

「要点だけで結構ですので、手短にお願いします」

「は、はい……」

映姫の圧力に気圧されつつも、文は手帳を取り出して丁寧に語りだした。

「…………わかりました。もう下がつていいです」

ひとしきり話を聞き終えると、映姫は小さく息をついた。

「え、いいんですか映姫様？」

「いえ、あなたにはまだ言いたいことがあります。下がつていいのはそここの射命丸のみです」

「…………そりやあんまりですよお」

「で、では失礼しますね！？」

脱兎の「」とく部屋を後にする文を見送ると、映姫は急に真剣な表情になつて、

「小町」

「は、はい！？」

「…………大至急、彼女を連れてきてください。手遅れになる前に」

「え……は、はい……？」

小町は丁寧に一礼をしてから、文と同く逃げるよつとして部屋を出でていった。

もちろん、扉をちゃんと閉めてから。

一人になつた映姫は背もたれに寄りかかって天井を見上げた。

「彼女は今、生と死の間で揺らいでいる。生きるか死ぬか……」

「元の疲れをほぐすように手で押さえながら、

「さて、仕事仕事……と」

机上で散乱する書類を手元に集めると、映姫は再び作業に取りかかつた。

第一十話（後書き）

そろそろ次の作品のことも考えないとですね。
また「一次創作するのもいいけど、今度は普通にファンタジー系を創
作しようかな。

もしもまた東方を書くのであれば、今度はオリジナルで「～する程
度の能力」を持ったキャラを書いてみたいです。

第一十一話（前書き）

一面に広がる向日葵の中。

ティータイムの最中、少女は一人の気配を感じた。

そうとも知らず、葉月は桜との思い出としてシーショット写真を撮っていた。

第一十一話

太陽の光をいっぱいに浴びて輝く、色鮮やかな黄色の絨毯。空を転々と流れる、大小さまざまな雲。

それはまるで、真夏の日のワンシーンを切り取ったようごとにとても爽やかな景色。

「今日も良い天気ね」

その向日葵の中に包まれながら、優雅に紅茶をたしなむ一人の少女の姿があった。

若葉色のセミロングの髪に、赤いチェック柄のスカート。少女は静かに瞳を閉じて口元にカップを近づけると、香りを楽しむようにゆっくりと一口つける。

「…………」こんなステキな時間を楽しんでいる最中なのに、一体だれかしら……？」

微かに感じる一いつの気配。

誰かがこの太陽の畑に侵入したらしい。

気配は妖怪と……もう一つ。

少女が今いる場所の遙か南の方から、少しづつだがこちらに近付いている。

「さて、どうしたものかしら？　あまり派手に動いては花に傷をつけてしまふ……」

まわりに咲き誇る満開の向日葵を一瞥してから、

「…………とりあえず、私も出向いてみようかしら」

カップを片づけ少女は立ち上がり、日傘をさしながら向日葵の道を歩き出した。

「すうー！　すうー！　一面向日葵だらけだよ！」

「葉月さんつたら、そんなにはしゃいだら危ないですよ」

太陽の畠に辿り着いた途端、葉月のテンションが最高潮に達した。右を見ても左を見ても、前も後ろも、視界全てが黄色に染まっている光景。

「こんな景色初めて見たよ。幻想郷つてホントにすげーね！」

「ふふ。それよりカメラはいいんですか？ 今は誰もいないから自由に撮影できますよ？」

「あ、うん。そうだね」

そしていつものようにカメラを構える葉月。あっちを向いたりこっちを向いたりと、相変わらず忙しそうな様子。それを見て桜は微笑んだ。

葉月は幻想郷を思いつきり楽しんでいる。

先輩に命令された時はどうなることかと不安だったが、今となっては桜自身も楽しく思っている。

葉月とこのまま幻想郷中を一緒に巡れたら、もしかしたらもう楽しいのではないだろうか？

一緒に飛んで、一緒に笑って、この幻想郷の全てを葉月と歩いて……

「一緒に……か」

こんな気持ちになつたのは初めてだつた。

彼女と一緒にいたせいか、自分の中の何かが少し変わつたのかもしれない。

思わず口元がほころぶ。

「桜さん！」

遠くで名を呼ぶ葉月の声。

ふと顔をあげると、葉月が大きく手を振つて桜が来るのを待つている。

「いまいきまーす

桜は手を振つて答えると葉月の方へ向かつて走り出す。

「どうかしましたか？」

なぜか葉月は少し照れくさそうに頬を染めながらつむいで、

「あ、あの……一緒に写真撮りませんか？」

「一緒に撮影つてことですか？　いいですよ。それぐらご安い御用で」

「ち、違うんです。その……」

「その……？」

首をかしげる桜に、葉月はしっかりと目を合わせて、
「一緒に写真に、つてことです。私と桜さんのツーショットで写真
を撮ろうかなと……」

桜は突然真顔になつて、

「わ、私は全然美しくなんかないですよ？」

「もう！　そーじゃなくて！」

そして葉月は桜のそばに寄ると、手に持つたカメラを大きく掲げて、

「はい、桜さん笑つて！」

「え、は、はい！？」

桜は言われるがまま、ぎこちない動作で笑つてみせた。

小さな音がして、それから葉月はカメラを下げた。

「ははッ。桜さん変な顔になつてるよ？」

「突然笑つてだなんて無理ですよ……もう」

画面に映つた二人の表情。

とても幸せそうに笑う葉月と、少々緊張して強ばつた顔の桜。

互いの顔を見てから、二人は一面に咲き乱れる向日葵のように明るく、笑いあつた。

第一十一話（後書き）

次のお話を考へ中です。
オリジナルのキャラの案はあるけど話の案がないもので……；

第一十一話（前書き）

うつそうと茂る向日葵を抜けて、一人は小さな池に辺り着く。歩き疲れた足を休ませていると、いつのまにか日傘をさした少女が立っていた。

ただならぬ殺氣を感じた桜は、葉月を連れて無言のまま太陽の畠を逃げるようになつていった。

第一十一話

写真を撮り終えると、一人は再び向日葵の中を歩きだした。
少しずつ奥へ奥へと進んでいくが、行けども行けども向日葵だけしか見えてこない。

最初は楽しそうにしていた葉月も、進むにつれてだんだんと表情が曇りはじめて、

「どこまで向日葵なんだろう……」

「全然終わりが見えませんね……建物も、妖怪も何も見当たりませんし」

「……もしかして、迷子になつたのかな？」

「そ、そんなことないですよ。帰り道ならさつききた道を引き返せば……」

そしておもむろに振り向いた桜。見えるのは向日葵と、向日葵と、向日葵と……

「……あれ？ 私たちどうから来たんでしたっけ？」

「え、ええ！？ も、桜さんもわからないのー？」

桜は申し訳なさそうにつつむいて、

「す、すみません……で、でも帰りも私と飛んで帰れば大丈夫ですよ」

「あ。そ、そつか。はあ……一瞬本氣で迷子になつたのかと思つたよ……」

ホツと胸をなでおろす葉月と桜。

そして再び歩き出す。

しかし一向に景色は変わらない。

ただ延々と、向日葵の道が続いている。

……と、桜はすることを思いついた。

「やうだ。私が飛んで進むべき道を探せばいいんですよ。それなら迷いつこうともありません」

「ホント？ ジャ、頑張つて桺さん！」

「おまかせください」

桺は低く構えると、空に向かつて一直線に飛んだ。

「ここは、えつと……」「

眼下に広がる向日葵の世界。

今いるこの場所は、この太陽の畠の真ん中に位置するらしい。

「それなら、ここのまままっすぐ行けば……？」

少し先に進んだところに小さな池が見えた。

そこまで行けば少しは休めるかもしれない。

「葉月さん。もう少し歩くと開けた場所があります。一度そこで少し休みましょうか」

「そうだね」

地上に降りると桺は方角を確認しつつ、池の方へと向かつた。

向日葵畠の真ん中でぽつかりと空いた草原と、澄んだ水を湛えた小さな池。

今の今まで向日葵ばかり見ていた一人にとつて、そこはとても安らぐ場所だった。

「さ、さすがに向日葵だけ見るとちょっと疲れますね……」「

「すうじくキレイなんだけど、ほら、向日葵って大きいから……」

歩き疲れた足を休ませるために、葉月は靴を脱ぎ捨てて裸足になると恐る恐る池に足を入れる。

「……冷たッ」

透明に透き通った水はとても冷たく、思わず足を離しそうになってしまふ。

それでも慣れてしまえばどうとこいつとはない。

葉月はそうしてしばらくなびりと足を休めていた。

空を見上げると、太陽は中天より少し西に傾いていた。

「もう少し休んだら出発しますか？」

「ん。そうだね。次はどんな場所に行けるのかな？」

「ふふ。楽しみにしててください」

「あら……ずいぶんと楽しそうね？」

突然、背後から凜とした声が聞こえた。

振り返ると、そこには日傘をさした少女が静かに微笑んでいた。

「…………何者ですか？ あなた…………」

気配も、音も、全く感じなかつた。

それは桜が気を抜いていたからか、それとも……

少女は変わらずにつこりと微笑む。

「ただの、花が好きな女の子…………かしら？」

「女の子…………ですか」

太刀を握る手が震えている。

桜は笑顔の少女に恐怖していた。

この人は、いや、こいつは……

「安心なさい。別に戦う気はないわ。ここで戦えば、花が傷付いてしまうもの」

警戒する桜に、少女は諭すように言った。

「えっと、あなたは？」

「名乗るような者ではないわ。それより…………」

「…………？」

少女は赤い瞳で一人を比べるように見てから、

「早くここを立ち去ることね。ここには怖~い妖怪がいるから危ないわよ」

「こ、怖い妖怪…………？」

くすくす笑う少女。

どこか、二人をからかっているように、ひどく愉しんでいるようにも見える。

「ど、どうしよう…………桜さん。今すぐ出発した方が…………？」

振り返ると、桜は険しい表情で少女をにらみつけていた。

まるで威嚇するかのように、瞳を細めてまっすぐに見据えていて……

「…………今日は見逃す、と？」

「ええ。その子に免じて、かしら。でも、気が変わつたら……」

その先は言葉にしなかつた。

相変わらず笑顔のまま、静かに一人を見つめている。

「行きましょう。葉月さん」

「あ、う、うと……」

桜はその後無言のまま、一度少女と向かいあって……それから空へと飛んだ。

「ただの雑魚、か。無駄足だつたかしらね……」

ひどくつまらないなそうにつぶやいた後、少女は向日葵の中へと消えてしまつた。

第一十一話（後書き）

名前を出していくせんがあの人です。

こつしてお話を書いていると、よく言葉が浮かばなくて苦労します；
まだまだ勉強が足りないなあ
…

第一二三話（前書き）

太陽の煙から飛んで一人は無縁塚に辿り着く。
歩き疲れたせいか、葉月はあまり元気がない。
桺は休める場所を探すため、近くを通りかかった紅色の少女に道を
尋ねることにした。

第一二三話

「ここまで来れば大丈夫でしょうか……」

むえんづか

太陽の畠から飛んで、現在一人は無縁塚むえんづかという場所にいた。

文字通り、ここは縁者のいない者亡骸を葬る場所。

誰も訪れない寂れた墓地に伸びる、深紅に染まる彼岸花。

それはまるで、哀れな死者へ手向けのようにも見える。

「ずいぶん寂しい場所ですね……」

「ここには無縁塚。この幻想郷に無縁の者が流れ着き、朽ちゆく場所

です」

「無縁……？」

「外から迷いこんだ人間、悪しき妖怪の餌食となつた者など……あまり気持ちのいい話ではありませんね」

小さな丘を降りると、桜は目の前で咲き誇る彼岸花を指差して、「でも、彼岸花は綺麗ですよ。ここまでたくさん広がつていて、情があるといふか……」

「うん……そうだね」

風に揺れる彼岸花の赤い花弁。

血のよう赤い花びらを見ていると、なぜか葉月の心が締めつけられるような気がして……

「どうかしましたか？ 葉月さん？」

「あ、えっと……ちょっと疲れちゃって」

葉月は赤い花からそつと田を反らした。

カメラも、首から下げるだけで触りうともせず……

「具合でも悪いんですか？ 葉月さん……？」

どこか様子のおかしい葉月に、桜は訝しげな顔になる。

「ど、とりあえず移動しましょうか。ここにいても仕方がありませんし」

辺りを見回して、休めそうな場所を探していると、

「……？」

桜の視線の先、誰かがこちらに向かつて歩いている。

紅色の髪に着物姿、そして大きな鎌を背負つた少女のようだつた。少女はそのまままっすぐこちらに向かつてくる。

「あの人には、どこか休めるような場所がないか聞いてみますか」

桜は少女に向かつて足早に歩き出す。

葉月を早く休ませてあげたい。

気がつけば、桜はその少女の元へと走っていた。

「……見つけた」

少女は小さくつぶやくと、背の大鎌に手をかけ、

「えつと、すいませんが近くに休めるような場所など……ツ！？」

桜の言葉はそこで突然途切れた。

少女の背負う大鎌が、一瞬のうちに桜の首筋へと突きつけられた。

「いちいち事情を話す暇はないんだ。さあ、あの女の子はどうだい？」

「い、いきなりなんなんですか！？　あ、あの女の子って……？」

「近くにいるんだろう？　早く教えないと、アンタの首が胴体とお別れすることになる」

「ツ！？　……何者です！？」

「小野塚小町。彼岸で死者を送る死神さ。今は任務で、あんたと一緒にいる女の子を連れて來るようにと映姫様から命じられたんだ」

「死神？　それに映姫様って……ツ」

刺すような痛みが桜の思考を止める。

大鎌の刃が、桜の首筋を切りつけ鮮血が流れ落ちる。

「たまにはマジにやらないと怒られるんでね。さあ、さつと教え

な」

「か、彼女は……」

少女の背後に、視線をゆっくりと移すと、誰もいない空間に向かつて大声で叫んだ。

「逃げて！？」

「な！？ 後ろつて……くそッ！」

小町はそれを疑うことなく振り返り、柾に一瞬の隙をとれた。

その一瞬で柾は太刀を下段に構え、すくいあげるようにして小町に斬りかかる。

反応の遅れた小町は大鎌で防ごうとするも対処できず、大鎌は小町の手から吹き飛ばされてしまった。

「しまッ……！？」

「今のうちに！」

体勢を崩した小町に、さらに柾は体をひねらせ左足で回し蹴りを放つ。

蹴りが直撃した小町は受け身を取れず、そのまま仰向けに倒れてしまつた。

「……ちッ、犬妖怪の分際で……つて、おい待て！」

顔をあげた時にはすでに柾の姿はなかつた。

体を起こし、近くの木の根元にまで転がっていた鎌を拾い上げると、忌々しげにその木を殴りつけた。

「くそッ……次会つたらただじやおかないよ……」

吐き捨てるようにつぶやいたあと、周囲を見まわしながら再び歩き出した。

殴りつけられた木は、その後メキメキと頭を立ててあつさつと倒れてしまつた。

第一二三話（後書き）

なぜか小町がものすごく悪役に見える……；

次回も戦闘回になりそうです。

こちらの更新をしつつ、一次創作の新作もちょっとずつ準備していますよ。

それと、お気に入り登録してくださった方々、まだ完結はしていませんがそれでも評価ポイントをつけてくださった方々、ありがとうございます！

第一十四話（前書き）

命からがら、小町から逃げ切った桺。

葉月の身を守るため、無縁塚中を走り回るも葉月の姿は見当たらぬ
い。

通り雨が止み、辿り着いた先で、桺は再び小町と対峙する。

第一十四話

小町からなんとか逃げ切ると、桺はすぐさま葉月を探した。

「早く逃げないと……葉月さんが危ない！」

咲き誇る彼岸花の間を風のように走り抜ける桺。

しかし、肝心の葉月の姿が見当たらない。

「こ、こんな時に……葉月も……つてダメだ。大声で呼んだらあの人に気づかれてしまう……」

姿を潜めつつ、桺は無縁塚を駆ける。

今来た道を戻つてみても、葉月どころか生き物も妖怪すら見当たらぬ。

仕方なく、桺はいつものように木に飛び移る。

高い場所から見渡せばすぐにでも見つかるはず。

霧の立ち込める無縁塚は幸いそれほど広くはない。

だからすぐに見つかる。桺はそう信じていた。

「…………いなし…………？」

見つからない。

見えるのは彼岸花と、粗末な墓標が散らばるだけの殺風景。

人の姿なんて、なかつた。

「そんなわけありません！ 千里見通せるこの私が、人一人見つけられないわけが……」

もう一度、目を凝らして見まわす。

目の前に広がる中途半端な霧が、桺を苛立たせる。

「どうしよう……ー？ もし葉月さんに何かあつたら私の責任だ……」

うつむく桺を責めるように、空から大粒の雪が降り出した。
気がつけば、どす黒い雲が頭上に広がっていた。

「……早く、見つけないと」

激しく降りしきる雨の中、桺は駆けだした。

……

もう一度、来た道を戻るつ。

それでもダメなら……

「ダメなら、もう一度走ればいい」

足に泥がはねても、茂る葉に身を切られても、桺は足を止めなかつた。

……すると、突然雨が止んだ。

どうやら通り雨だったようで、雲が晴れると綺麗な茜色に染まつていた。

「あ……れ？　ijiは……？」

目の前に見知らぬ大きな川が流れている。

茜色に染まつた川を見ていると、なぜか無性に寂しさを感じた。

「ijiは……」

「三途の川。あたいの仕事場さ」

冷淡な声が背後から響く。

振り返ると、いつの間にか大鎌を構えた小町が立つていた。桺は驚いて大きく飛びずると、武器を構えて睨み合ひ。

「まさかそっちから来てくれるとは思つてなかつたよ。教える氣になつたのかい？」

「……彼女になにをするつもりなんですか

「言えないな。それより……」

小町の体から一気に殺気が吹きだす。

先ほどとは打つて変わつて、真剣な顔つきで桺を見据える。

「ハッタリかますわ、だまし討ちはするわ……山の妖怪つてのは汚いやり口が好きなんかね？　でも、今度はそうはいかないよ。あの女の子の居場所を吐かせるまで、徹底的にやらせてもらひつ

「……ッ」

ぴりぴりと感じる殺気に顔をしかめる桺。

小町は本気で、殺し合いを始めるつもりらしい。

全身の毛が逆立つのが嫌でもわかる。

「どうしてあんたはあの女の子をかばうのや。おまえには関わりのないことだろ?」「

「か、彼女は……」

一呼吸おいてから、柵はキッと小町を見据える。

「彼女は、私の大切な友人です。だから私は、友を守るために、貴女と戦います」

「……友情？ そんな目にも見えないもののために命を投げ売るというのか？ ……滑稽だな」

瞬間。

小町の大鎌が真上から柵に襲いかかってくる。それを太刀で受け止めるが、全身にのしかかるような重い一撃に柵はあっけなくひざをついてしまった。

「ぐうッ …… ! ?」

「山の哨戒程度しかできない妖怪に、あたいが負けるとでも思つてるのか！」

小町は先ほどの柵の動きを真似て、鎌をすくいあげるよつとして振り上げる。

大鎌で太刀が吹き飛ばされそうになるが、必死に力を込めてなんとかそれを守る。

たつた一度の攻撃。

それだけなのに、柵は全身は震え、肩は大きく上下させていた。

「はんッ。あたいはまだ本気のほの字も出してないってのに、あんたはもうずいぶん辛そうだね」

「はあ、はあ、はあ……わ、私だつて、まだ本気を出してませんよ

……」

「またお得意のハツタリかい？ 全然そつはみえないけどねえ？」
こうなつたら、スペル・カード術符を使うしかない。

柵は一度大きく飛んで距離を取ると、懷から一枚の符を取り出す。

「……！」

それに小町が目を細める。

瞳を閉じ、符に意識を集中せると、柵を中心には光の奔流が溢れだす。

「狗符・レイビーズバイト」

静かにささやくよつと唱えると、柵を包む光の奔流がその強さを増した。

「白狼の牙、仇名す者を引き裂け！」

柵が腕を伸ばすと、握りしめていた符から強い光が放たれる。

そしてそれは大地を駆ける狼の如く、小町に向かつて躍りかかつた。

「……なめられたもんだ」

襲いかかる光の牙を前にして、小町は小さくつぶやいた。

おもむろに大鎌を大きく縦に構え、光の奔流に真正面から向かうと、

「はあッ！？」

気合いとともに一閃。

光をまとった狼は、小町を歯牙にかける間もなくあっけなく両断されてしまった。

消えゆく光を見て柵は愕然とした。

「そ、そんな……！？」

「これぐらいの弾幕ぐらい、死神が斬れなくてどうするの？』そして

……

刹那。

小町が柵に再び大鎌を突きつける。

「抵抗しなさんな。あんたはさつたとあの女の子の居場所を教えればそれでいい」

「……ッ」

「安心しな。正直にいえば命まではとりやせんよ。まあ、あの女の子はどうなるかは知らないが……」

「……」

「……それでも情をとるのかい？ やれやれ変わった妖怪だね……」

慄然とした面持ちで、小町はため息をついた。

大鎌の刃を柵の首に押し込むと、低い声音で言つてくる。

「これが最後のチャンスってやつだ。さあ、女の子はどうだい？」

「……」

桜は答えない。

無言のまま、うつむく。

「………… そうかい。じゃあ…………！」

「待つて！」

すると、三途の川に少女のかん高い声が響いた。

桜はハツと顔をあげ、声の方へと振り向く。

紺色の服に肩まで伸びた黒髪。

そして首から下げる、桜をあしらったストラップ付きのカメラ。

夕日を背に少女が一人立っていた。

逆光で表情はハッキリと見えないが、間違いない。

「葉月………… ゃん！？」

葉月は悲しそうな瞳で、桜ではなく小町を見据えていた。

第一十四話（後書き）

怖い……小町が怖い w
なんていうかものすごく悪役に見える；
むしろこっちの方が死神らしいといえばらしいんですけど……

第一一十五話（前書き）

窮地に立たされた桺を救つたのは葉月だつた。
葉月は桺をかばうため、小町と共に彼岸を渡る。
残された桺と文は、ひとまず妖怪の山へと飛んでいった。

第一十五話

「葉月……それがあなたの名前かい」

「そんなことより、桜さんを放してくださいー。」

小町は桜を一瞥してから葉月に向き合つた。

「なら、あたしについてきてはくれないかね？ そうしたらコイツは斬らないさ」

「……わかりました。そちらに行きます。だから桜さんを放してー！」

「は、葉月さん……」

大鎌が桜の首筋からゆっくりと離れる。

そして収めると、小町は葉月に近付いてしげしげと見つめた。

「寿命が見えない。あんたで間違いないな」

「え……？ 寿命が見えない？ ビ、ビウー！ ですか？ だつて葉月さんはただの人間でしょー？」

「ん？ おまえ知らないのか。こいつはな」

小町が口を開きかけた時、どこか遠くの方から轟音が聞こえてきて、
「桜いいいいいい！」

「へ？ は？ 今先輩の声がつてぎやあああああー！？」

聞き覚えのある声とともに、音速を超えるような勢いで桜に何かが突っ込んできた。

隕石の如く突っ込んできたのは文だった。

ぜいぜいと息を荒げて、衝撃で倒れた桜を抱き寄せるひと

「も、桜い！？ だ、誰にやられたんだ！？ こんなにボロボロになつてなんと哀れな……」

「ハ割ぐらじおまえさんのせい……ってかなにこいつそり笑つてんだ」

「ああ。気絶してる桜さんが面白い顔をしていてついとか言いながらキチンとシャツターカーを切る文。

桜はその下敷きになりながら目をぐるぐる回していた。

それを見て、小町は呆れた様子で頭をかきながら、

「……なんかシリアスな空氣が血湧き立つちやつたね。あんたは大丈夫かい？」

「は、はい……」

葉月に田をやつた。

怯えた様子で、時折心配そうに柶の方を見ている。

「そいつなら大丈夫さ。ただ気絶してるだけだし、妖怪なんだから傷はすぐに治る」

「そうですが……」

「あやや？ もしかして結構良いタイミングで登場しちゃいましたかね？」

「むしろ逆だろ……」

コホンと咳払いをして、小町は氣を取り直すと、

「それじゃ、来てくれるな

「わかりました。行きます……」

葉月を連れて、彼岸を渡ろうと船へと向かう。乗り込む瞬間、葉月は一度だけ振り向いて文と倒れる柶を一瞥すると、

「……いろいろとありがとうございました」

深く一礼をした。

「天狗。後のこととは任せせる。そいつにちゃんと事情を説明してやつてくれ」

「あ、いやでも……」

「それじゃ、いくよ」

小町の船が岸を離れる。

茜色の川を、音もなく静かに進む。

そしてだんだんと小さくなる小町の船を、文はその姿が見えなくなるまで見送った。

「……さて、柶にはどう説明したものか……」

柶を抱えると、文はあれこれ考えながら夕田と反対方向に飛んでい

つ
た。

第一一十五話（後書き）

次回作……ただいま構想中。

というか、更新の連絡用にツイッターか何か始めようかな
そういうの、あんまり詳しくないもので：

第一十六話（前書き）

田を覚ますと、桜は見覚えのある部屋で寝ていた。傍で解放するにとりの姿はあるが葉月の姿は無い。にとりを問い合わせるが、その答えは文から告げられた。

第一十六話

「う、う、う……ん……？」

目を覚ますと、桜は見覚えのある部屋で寝ていた。

ふと外を見るともう暗く、あれから多少の時間が経過したようだつた。

「私、小町さんに負けそうになつて、それから……先輩の声が聞こえて……？」

そこから先の記憶がない。

なぜか頭だけ妙にズキズキと痛むのだが……

「お？ 気がついたか桜～？」

戸の隙間から、にとりがちよこんと顔をのぞかせた。

そのまま部屋に入ると、桜の真横に座ると、

「にとり……？ つていうかどうして私はここにいる……？」

「えつとな、桜はさつき文に運ばれてだな。んつと」

「……そうだ。葉月さんは？」

「うんと……その……」

部屋を見回しても、葉月の姿が見当たらない。

もしかして下だらうか？

それなら早く起きないと……

「う……！」

体を起こさうとするが、桜の全身に鈍い痛みが走る。

「無理するなよ。今起きたばっかなんだぞ」

「にとり、葉月さんはどこですか？」

「え？ あいや、そのう……」

気まずそうに田を反らしたにとりの様子に、桜は田を細めた。

桜はすぐさまにとりに掴みかかり、強引に揺さぶるよつこして、

「彼女はどこなの？ ねえ、にとり？ ……にとりー？」

「お、落ち着け桜！？ これには事情があつてその……」

「そこからは私が説明します」

すると、いつの間にか文が腕を組みながら口に寄りかかっていた。

「先輩……？　じ、事情つてなんなんですか？　葉月さんは」

「彼女は、小町さんと彼岸へ向かいました。彼女は……人間ではありますんで」

「……は？」

桜は文の言葉を耳にして、思わず間の抜けた声を出してしまった。
唾を飲み込んで、文に向かつて訊ねる。

「人間ではないって……いきなりなにを言つてるんですか？　彼女は外界から迷いこんだ人間だつて先輩も話を聞いたじゃないですか？」

「」

「外から来た、というのは間違いないようです。ただ彼女の場合……」

そこで文は言葉を止めた。

目を伏せて、桜に事実を言つべきかと一瞬迷う。

逡巡の後、文は顔を上げて桜をまっすぐ見据えた。

普段見せないような真剣な眼差しに、桜は少しだじろぐ。
そして、文が口を開いた。

「彼女はもう、死んでいるんです」

「……え……？」

その言葉に、桜の瞳が大きく見開かれた。

第一一十六話（後書き）

土日以外とはいって、さすがに毎日更新するとお話があつとこつ間に進みますね。
まだまだ未熟なお話ですが、最後までお付き合いくださると嬉しいです；

第一一十七話（前書き）

葉月という存在について、話をしている小町と映姫。話が終われば、いつものようにお説教が始まった。そんな光景をじつそり覗いていた葉月の体に、異変が起っていた。

第一一十七話

「不安定な存在……ですか？」

映姫の事務室で小町は首をかしげていた。

「そう。彼女はとても不安定な存在なのです。幽霊や亡靈とも違つ、かといって人間でもない」

「……いまいち意味がわからんのですけど」

映姫は手元の書類を見ながら淡々と答える。

「彼女は外界で自殺を図ったようですね。理由は定かではありませんが……その時抱いていた意思、この場合は未練と言つたほうが正しいでしょうか。それがとても強かつたようです。死すらも拒むほどに……」

「自殺つて……」

穏やかではない話に小町が眉をひそめる。

「そして未練を残した魂が彼岸に辿り着き、渡る直前に覚醒したのでしよう。言わば半人半靈状態でこの幻想郷を彷徨いそして……」

「不安定な存在っていうのは……どういう意味なんですか？」

「……この幻想郷に無縁の者が流れ着いた場合、どうなるか知つてますね？」

頭の中で言葉を探るようにしながら、小町が答える。

「えつと、妖怪のエサになつたり、死体はそのまま妖怪になつたりするんですね？」

「彼女もまたこの幻想郷には無縁の者。いつか朽ちゆき、害を成す妖怪となりえる可能性があります」

「いやでも、あの天狗が世話してれば死はないんじや……」
映姫の瞳が鋭く細まる。

「どこぞの半人半靈の庭師や商人のそれとは訛が違います。一度死んで生まれた彼女そのものが不安定なのです。いつ何が起きても不思議ではありません」

「突然妖怪になる……とでも？」

「可能性はゼロではありません。それに……」

「それに？」

細い目で、小町を見つめると、

「あなたも含め、これは我々の管轄下での失態です。責任はとりませんと」

「いや、だつて急に船を降りるもんだからあたいま思わず呆気にとられちゃって……へへへ」

「笑つて『まかさない！』

「きやん！？ すいませんすいませんすいません……」

鼓膜が破れるんじゃないかと思えるほどの声に、小町はただただひれ伏すのみ。

そこからいつものようなお説教が始まつて……

「あれが閻魔様……？」

そんな光景を、戸の隙間からこっそり見ていた葉月。

一人のやり取りを見て、体が小刻みに震えだす。震える体を抑えようと自分の体を両手で抱えようとして、

「…………え…………？」

葉月は絶句した。

体を抱える腕に、スカートの紺色の生地が透けて見えた。恐る恐る両腕を見ると、部屋の床も透けて映つている。

気がつくと、葉月の体は半透明にぼんやりと揺らいでいた。

第一一十七話（後書き）

まだまだ修行が足りない……；
あ、そうだ。

作品についての後書きは一番最後に書きます。
ですので安心してください（？）

第一二十八話（前書き）

葉月の事実を聞かされ、信じられないと激昂する桜。その真実を自分の目で見るため、傷付いた体を無理やり起こすと、一人彼岸へと飛んでいった。

第一一十八話

「どうこうしたことですか！？　葉月さんが死んでるって……！　そんなわけないじゃありませんか！」

文は桜から口を反らすようにして、

「本当のことなんです。小町さんは詳しいことは教えてくれませんでしたが、彼女は本当に……」

「そんなことがありますん……！」

文の言葉を遮るように桜の怒声が部屋中に響いた。

「も、桜い……」

なだめようとするにとつの手を振り払つと、桜は無理やり体を起こす。

「ッ……！」

「無理するなつて。わつき起きたばかりだろ？」

葉を食いしばつて立ち上ると、顔をしかめながら、

「……これくらい、なんともありません。私は今から彼岸へ行きます」

「桜、無駄です。今頃彼女はもつ」

「行きますッ！……行くつたら行くんです！……」

枕元に置いてあつた太刀と盾を背負うと、乱暴に口を開け放つてさつさと出てしまつた。

そのあまりの剣幕に、にとりも文もただ呆然としてしまつた。

「桜つて、あんなに強引なところもあるんだな……」

「あんな表情初めて見ました……ぜひとも激写するべきでしたね」

「……おまえ、そんな余裕あつたか？」

「ぜ、全然……今の桜にそんなことした上同とか関係なく容赦なく叩き斬られてたかと」

「…………はあ」

たまつた息を一気に吐き出すると、にとりも文もその場に仰向けに崩

れた。

そしてそのまま、ぼつぼつとしゃべりだす。

「……どうする？ 放つておくのか？」

「『白狼天狗VS地獄の最高裁判長 その結末やいかに！？』…………
なかなか面白そうな記事じやないですか」

「こんな時にも新聞かい……」

文は立ち上がると、一度服装の乱れを整えてから愛用のメモを取り出す。

そして今度は窓へと向かって、

「善は急げ！ ということで行きますよにとりさん！」

「へ？ 私も？ つておい、そんな急に腕を引っ張るんじやなああ
あああ！？」

「レツツ、ゴー！」

にとりの腕を適当に掴むと、文は窓から飛んで枕を追いかけた。
二人が飛び出したときには、幻想郷の空に満点の星々が煌めいていた。

第一十八話（後書き）

今更ですが、このお話地の文が少なくないですか……？
キャラの会話ばかり多くて、風景や心情の描写が少ないような気が
して；

次のお話を書くときに注意をつけないとなる……

第二十九話（前書き）

夜闇に包まれた彼岸。

桺は三度小町と対峙する。

葉月に会うために、桺は太刀を構える。

第一十九話

夜の帳の降りた彼岸。

白い霧がぼんやりと立ち込めるその場所は、先刻とは違い不気味な雰囲気をかもし出していた。

「……」

桺の視線の先、桟橋の上。

そこには小町が腕を組みながら静かに仁王立ちしていた。

「……だいたいの察しはつく。あんた、ここを渡るつもりだらう?」「さくうなさいて、

「ええ。ですから船を出してください」

桺が答える。

小町はやれやれとため息を一つしてから、見下すように桺を一瞥して、

「……そこですんなり出すと思つのかい? そつさね……」

大鎌が月の光に閃く。

満月を背後に小町が桺に突然飛びかかった。

「おまえさんがここで死んでしまうのであれば、お望み通り連れて行つてやるよ!」

「それはお断りしますッ!」

太刀と大鎌が交差する。

激しい火花を散らしながら、二人の戦闘が始まった。

大鎌を振りながら、小町が叫ぶ。

「そんなに葉月つて子が大事なのかい? おまえさんは妖怪。あの子は人間。生きる場所も時間も、おまえさんとでは途方もないほどに違ひ過ぎるというのに!」

「だから何なんです! 友に、生きる時間も場所も関係ありません!

桺の攻撃から逃れるように大きく後退すると、苦い顔をして、

「あの子がすぐに消える結末を知つてもか！」

吠えるようにして小町が叫んだ。

その言葉に、桺が驚き動きを止めてしまった。

「き、消える！？ 葉月さんが……、ツ！？」

一瞬の動搖、その瞬間に襲いかかる刃を桺はすんでのところで受け止める。

たたみかける刃とともに小町は言つ。

「あの子はもう、この幻想郷では生きられない。このまま居続けたらやがて朽ち果て、醜態をさらしながら人々に害を成すかも知れない！ それでもおまえは、あの子を留めようといふのか！？」

桺は小町を強く見据え答える。

「そ、そんなこと……私が絶対になんとかして見せます！」

「ツ……わっからずやが！！」

強引になぎ払うように鎌を振つて桺を吹き飛ばすと、小町は胸元から一枚の符を取り出す。

それは以前桺が使つた符と同じ術符。スペルカード

小町を中心に、同じく光の奔流が現れ全身を包む。しかしその光は、桺のそれを簡単に凌駕してしまつほどに輝き、辺りに凄まじい烈風を巻き起こした。

「ツ……！？」

「死神の術符。スペルカード その身を以つて受けな！」

奔流の強さが途端に強まる。

桺に向かつて突き出す両手から、激しい勢いで光弾がほとばしる。それは散弾のように放射状に大きく広がると、一斉に向かつて襲いかかった。

「こんな量の弾幕、防ぎきれるわけ……！？」

大きな爆発とともに、桺は閃光に包まれて見えなくなつた。

「プライス・オブ・ライフ。その身で命の重さを思い知ることだね」この一撃で、決まった。

小町はそう確信して大鎌を背負い、桺橋へ振り返ろうとして……

「…………」

背中に気配を感じてそれを止めた。

「…………ゲホッ、ゲホッ…………ぜ、絶対に…………渡してもらいますよ

…………」

桜は太刀を杖のようにして立ち上がると、フリフリしながらもまつすぐ小町を見据える。

しかしその瞳は虚ろに揺れていた。

全身ボロボロで立ち上がることで精一杯なはずなのに、桜は盾を投げ捨て太刀を構える。

「…………哀れなヤツ。おまえさんのためにあたいはここを守っているのだと知らずに…………」

「はあ、はあ…………絶対に、絶対に葉月さんに…………」

そこで、桜の意識は途切れた。

まるで糸の切れた人形のようにあっけなく倒れてしまった。

「…………つたく、これじゃあたいが一方的に悪役みたいじゃないか」

そして頭をがしがしと乱暴にかけてから息を一つ吐いて、

「あ～あ。また映姫様に叱られるんだろうな…………あたい」

自嘲気味に微笑むと、小町は倒れた桜を背負つて自分の船へ乗り込んだ。

「桜さん加勢に来ましたよ～…………って、あれ？」

文たちが彼岸に辿り着いたころ、彼岸には誰一人いなかつた。

第一十九話（後書き）

もう少しで終わります；
完成までしつかり頑張りますね

第三十話（前書き）

白く輝く月とその光に照らされた人影。

気がついた桺が顔をあげると、その人影は先ほどまで戦っていた小町だった。

そして桺は今、三途の川を渡る船の上にいた。

目を開けると、白く輝く満月と、その光に照らされていいる人影が見えた。

人影は無言で、前を見つめながら大きな櫂を握っている。
どうやら今船の上にいるようだが……

「ここ……は……？」

か細い声に気づいた人影は、ゆっくりとこちらに振り返つて、

「お、気がついたか」

「う」と笑つてを見せた。

それは先ほどまで戦っていた小町だった。

桟が慌てて体を起こすと、全身がゆらゆらと揺れだす。

「おつと、急に動くんじゃない。船が揺れて沈んじまつかもしれんだろう？」

「え、え、私どもして船に……？　ま、まさか、本当に死んじやつた……！？」

「ほっほ。もしそうだったらあたいと言葉を交わしてない」
けらけらと明るく笑いながら小町が答えて、

「おまえさんも変わったヤツだよ。たかが今日会つたばかりの人間にそこまでするなんてね。そんなに気に入った人間なのかい？」

「ええ。すごく魅力的な人ですよ。優しいし、一緒にいるとすごく
楽しくて」

「……そうかい」

輝くような桟の笑顔に、小町は少しだけ目を細めた。

そしてまた黙つて櫂を操る。

それからしばらく無言のまま船は進んでいった。

「……そりゃねば、小町さんはどうして私を運んでくれてるんです
か？」

「ん。ただの気まぐれさ。せめて別れの挨拶ぐらいなら映姫様も許

してくれるだらうな

「別れの挨拶つて、私は葉円さんとお別れするつもりはありませんよ？」

「いや、だからさつとき言つたうつて……」

振り返ると、桺の瞳がまっすぐ小町を見据えていた。

「……そうかい。もう何も言ひまいて。後は自分でなんとか頑張んな

「はい。そのつもりです」

そして桺は微笑むんだ。

その笑みを見て小町は、

「……哀れなヤツ

桺に聞こえないよう、小さく呟いた。

そして船は音も立らずに進んでいく。

すると、立ち込める霧の向こうに建物の影が見えた。
ほどなくして船を泊める桺橋も見えた。

小町は櫂を器用に振つて桺橋の横に船をつける。

「その、ありがとうござります」

「ああ。気をつけて……な」

桺は小町に丁寧に一礼すると、桺橋に飛び乗つて宮殿へと走りだした。

その後ろ姿が見えなくなるまで、小町はただ黙つて見送つていた。

第三十話（後書き）

物語の最後を書くのがちょっと苦手で作業が微妙に遅れています。
今月中には最終話書いて更新できるかな……？
そろそろ新作の方も更新しないと……；
ちょっと忙しめです

第三十一話（前書き）

宮殿の中で見つけた装飾の施された不思議な門。

突如現れた映姫は桺に、それが『黄泉の道』への門だと伝える。

葉月はこの先にいる。

桺は門の奥へと走り出した。

第三十一話

華やかな装飾の施された、大きな宮殿。

とても地獄とは思えないほど荘厳で、美しい場所だった。

「この寒気さえなれば、ですけど……」

全身に這い寄るような寒氣に、桜は体をぶるぶると震わせていた。それでも桜は葉舟を探すためにあちこちを走り回る。

すると、長い廊下の先に同様に装飾された大きな門を見つけた。

なぜかそこからだけは、宮殿全体を包むような寒氣を感じなかつた。

「えつと、これは一体……？」

「それは『黄泉の道』への門です」

「ツ！？」

突然背後から聞こえた凜とした声に驚いて振り向くと、そこには桜より若干背の低い少女が不思議な棒を持ちながら立っていた。

少女はゆっくりと歩いて、桜に近付きながら、

「外界と地獄を結ぶ道。あなたがお探しの人はその先です。本来は通すこと許さないのですが……」

門の先を指差して言つた。

その言葉に桜は不思議そうに首をかしげた。

「……あなたは行かなくてよろしいのですか？」

「え……あ、そうだ！ ぐずぐずしてられない！ し、失礼します！」

そして桜は慌てながら、黄泉の道への門を両手で一気に押し開けると走り出した。

その後ろ姿を少女、映姫は横目で追いかけながら、

「全く。小町つたらこんなに簡単に侵入を許すなんて……帰つてきたら辞表でも書いてもらおうかしら？」「あ、あんまりだあー！？」

つぶやいた独り言に、いつの間にか現れた小町が涙目になりながら反論する。

「あら。戻っていたのですか」

「そ、その、映姫様クビだけは」勘弁を……」

「一応保留とこい」とこじておきます」

「ぐ、ぐぐぐ……」

ふうとため息をついてから、映姫は門に背を向けて歩き出した。「小町。あの妖怪が戻ってきたら山へと送つてあげてください。それから」

「それから?」

じろりと小町を睨みつけ、

「その後説教です」

「ひ、ひい～！？」

冷たく放たれたその言葉に、小町の悲痛な叫びが宮殿中に響き渡つた。

第三十一話（後書き）

次のお話が短めなので、明日2話分まとめて更新します
ちょっと遅れるかも…… しれません；

第三十一話（前書き）

黄泉の門をくぐると、そこは闇が広がるばかりだった。
光も、風も、何も感じない。

闇の中をあてもなく歩き続いていると、微かな光を前方に見つけた。

そこには闇が広がっていた。

後ろを振り返つても、いつの間にか門は閉ざされていてなにもない。黒い闇だけが漠然と広がっている。

そんな闇の中を、桜は恐る恐るゆづくつと歩く。

一体ここはどうなのだろう。

闇の中。

風も。

気配も。

全く感じない。

桜は少しづつ不安になつてきただ、それでも葉舟を探すために歩き続けた。

すると前方から、微かな風を感じた。

そしてそれから今度は小さな光が見えた。

光に向かつて歩くと、光がだんだんと大きくなつていく。

どうやらちゃんと進めているらしい。

安心した桜の足取りが、徐々に速くなつて、最後はもうほととぎ全
力で走つていた。

目の前の光が溢れて、桜を包んで、その瞬間に思わず目をつぶる。
目を開けると、そこは燃えるよつた夕日に漏れられた茜色の世界が
広がつていた。

第三十二話（前書き）

黄泉の道。

茜色に染まる世界の中で、桜は葉円を見つける。

振り返る葉円の頬には、茜色に照らされた涙が一筋輝いていた。

茜色の景色がどこまでもどこまでも続いていた。

道も。

空も。

咲き誇る花も。

全てが茜色に染まっていた。

「ここが、黄泉の道……？」

辺りを見まわしていると、なだらかに伸びた道の先で小さな後ろ姿を見つけた。

茜色の世界にぽつんと落ちた紺色の人影。

間違いなく葉月だ。

「葉月さん！」

桜は大きく手を振りながら声をかける。

人影はほんの少し揺れた後、一度こちらを振り返りつつとして止めた。

「あ、あれ……？ 聞こえなかつたかな……？ もーい！」

今度は手を振りながら葉月の元へと走った。

葉月にどんどん近付いて、あと少しで触れられそうながら近付くと、

「…………桜さん」

葉月から、声をかけられた。

そしてゆっくり振り返ると、

「あれ……？ 葉月さん泣いてたんですか？」

葉月の頬に涙が伝っていた。

それは夕日に輝いて、オレンジ色の宝石みたいにキラキラと輝いていた。

「そ、その……ごめんな。何も言わずに勝手に……」

「いいんですよ。私とあなたはもう友達なんですから堅いこと言い

つに無しです。それより、こんなところにいないで次の写真を

「もう、いいよ」

「……え？」

葉月の言葉の意味がわからず、桜は間の抜けた声を出してしまった。

そのまま葉月が続ける。

「その、私はもうあの場所にはいられないから……だから、写真はもうこここの

「な、何言つてるんですか！それぐらい私がなんとかしてみせますよ。」この幻想郷には凄腕のお医者様もいますし、その気になればにとつせんの発明でも……」

「桜さん、これ見て」

スッと差し出された腕に、桜は目を落とすと、

「……えッ！？」

葉月の体は半透明に透き通つて、地面を色を映していた。

「時間がもう……ね。だから私はもう行かな

「大丈夫です！」

葉月の言葉を遮つて、叫ぶように桜が、

「」これぐらい全然問題ないですよー。お金なら私の給金から出しますし、それにお医者様の住んでいる場所も不思議な竹林で、きっと葉月さんも楽しめると思いますから、だから……」

「桜さん……」

声がかすれて、桜は俯く。

「だから、だから……」

桜の声は震えていた。

気がつけば体も震えていて、視界が霞んで……

「だから、お別れなんて……私は……私は……」

「……桜さんって、けっこう、わがままなところ……あるんだね」

葉月の声も、同じように震えていた。

二人して嗚咽をこらえて、それでも葉月は無理して笑おうとして……

「桜さんに、会えてよかったです。桜さんに会えてなかつたら今頃私

は……」「

「嫌です！ そんな、 そんな最後のお別れみたいな………… 言葉……

……ツ」

「桜…………さん」

もう、限界だつた。

桜の頬から大粒の涙が滝のようにあふれて、 あふれて……
「たつた、 一日でお別れなんて…… そんなの、 寂し過ぎますよ…………

「私も…………寂しいよ。 桜、 さん…………」

葉月はそっと桜に近付くと、 両手で優しく抱きしめた。

この身で感じる確かな温もりが、 桜を包みこんで、

「ねえ。 離れていても、 桜さんは私の友達でいてくれる？」

「…………無論です。 何があつても、 あなたは私の大切な…………」
しゃくりをあげながら、 桜は葉月をまっすぐ見つめた。

「大切な、 友達です…………」

その言葉を聞くと、 葉月は嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう。 桜さん」

そして、 葉月の笑顔は茜色の風の中に消えてしまった。

「え…………？ 葉月さん…………」「

もう、 声は聞こえない。

温もりも、 感じない。

ただ、 目の前には空虚な世界が広がっていた。

「…………う、 うわああああああああ！」

涙が枯れるかと思つぐらい、 桜は泣いた。

泣いて、 泣いて、 泣き続けて、

「…………ツ」

乱暴に涙を拭うと、 無言のまま立ち上がつた。

そして振り返つて歩き出さうとした時、 ふと足元に何か落ちている
のに気がついた。

無造作に拾い上げると、それは葉月のカメラについていたストラップだつた。

紅葉をあしらつた、可愛らしいストラップ。

樺はそれを強く握りしめると、元来た道へと歩き出した。

……途中、葉月のいた場所を振り返る。

そこにはもう、誰もいなかつた。

第三十二話（後書き）

次回、最終回＆後書きを更新します。
短いお話だから、やつぱりあつといつ間に終わっちゃいますね；
では、また明日ー。

第三十四話（前書き）

あれから毎日が少し流れて。

梶がでたらめな見出しにため息ついていると、にとりから将棋の誘いを受けた。

並んで歩く梶の太刀に、にとりは洒落たストラップが付いていることに気がついた。

それは紅葉をあしらった、可憐らしいストラップだった。

『妖怪の山の侵入者！？ 謎の人物に白狼天狗が迫る！』

でかでかと書かれた新聞の見出しに、榊は大きなため息をついた。

「先輩つたら……結局私は新聞のネタですか……」

記事の内容もろくに見ないで折りたたむと、榊は任務へと戻った。妖怪の山の哨戒の任、榊に命じられている任務。

高い木の上で、いつものように山の見張りをしていた。

眼下に広がる森の中を監視して、いつでも対処できるようになると意識を集中させていると、

「……もう、この木も枯れ始めちゃいましたね」

足元の木を見つめながら、一人つぶやいた。

ほとんど枝だけの、寂しい木。

その木の枝に腰をかけて、榊はいたわるように触れる。

「お～い！ 榊～？」

すると、下から聞き慣れた友人の声がした。

覗きこむと、いつものレインコート姿のにとりが木の根元から、

「将棋やるぞ～！ 今日はゼッタイ負けないから～！」

榊に向かつて叫んでいた。

「ええ～！ いいですよ～！」

それに答えると、すぐさま木を下りる。

「今日こそ私が勝つからな。……あれ？」

「どうかしましたか？ にとり？」

にとりは榊の腰の太刀を指差して、

「おまえの剣、そんな洒落たものついてたっけ？」

不思議そうにそう言った。

にとりが指差したものは、榊の太刀の柄に結んであったストラップ。

「これですか？ これは……」

真っ赤に色づいた紅葉をあしらった可愛らしいストラップ。

一呼吸おいて、

「大切な友達から預かつた、忘れ物ですよ」

「……そつか」

寂しそうにつぶやくと、遠い遠い空を見上げた。

幻想郷の秋は、静かに終わりを迎えるとしていた。

{ End }

第三十四話（後書き）

紅葉記、最終話。

この次はあとがきです。

～紅葉記　あとがき～

このたびは『東方紅葉記』を読んでくださいまして、ありがとうございました。

こちらのサイトでの執筆は初めてで慣れない部分も多く、大変でした
たが何とか書き終えることができました。

閲覧者数が表示される、といつのはとても嬉しくて毎日チェックして
いました（笑）

閲覧者が伸びれば、読んでくれた人に感謝。

逆に減つてしまえば、ちょっとしょんぼりしたり。

前のサイトでは味わえない緊張感を体験できて楽しかったです。

今回、二次創作の処女作として書き上げた紅葉記、いかがでしたでしょうか？

自分としては……100点中、30点ぐらいの出来だと反省しています；

まだまだ未熟な部分が多くて恥ずかしいかぎりで……

次のお話を書くときには、もう少し上手な文章を書きたいです！

あとがきなのでちょっとだけ元ネタを披露いたします

まず主人公、時雨葉月。

もともと彼女は設定上では『紅葉』といつ名前でした。

二人の紅葉が、幻想郷を旅して、それから……といつのが原案でした。

名の由来は旧暦の八月の『葉月』を拝借しました

続いて祖父、時雨天高。

個人的にすごくカッコいい名前で気に入っています（笑）

最初は、幻想郷を旅していた写真家で、梳と面識がある、文のカメラの師匠だの、なぜか妙にはつちやけてた設定のおじいちゃんでしたが、ちょっと無理やり感が強すぎたので、結局その案はボツとなりましたが……

由来は秋の季語であり、俳句の歌い始めとして有名な『天高し』から取りました

そして一人の姓である『時雨』もまた秋の季語であり、主人公たちは皆秋に関係する言葉を名前に使ってみました。

もう少し、語彙や風景描写が細かく出来たら、東方シリーズの美しい世界観を上手に表現できたのですが……まだまだ修行不足です；

あんましネガティブなコトばっか言つてもしかたないので、そろそろあとがきを終えようと思います。

読んでくださった皆様。

お気に入り登録や、評価ポイントを入れてくださった方々。ありがとうございます。

これからも執筆を続けて、いつかステキな小説家になれるよう、頑張ります。

それでは、次回作で会いましょう！

拙い文章でしたが、最後までお付き合いでいただき、ありがとうございます。

次回作は……早ければ来週の月曜日にでもうロードできるかな。
次の作品も、読んでもらえたら嬉しいです。

それでは。

～紅葉記 あとがき～（後書き）

最後までお付き合はせていただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3787p/>

東方紅葉記

2011年5月15日04時23分発行